上人の弟子となつて出家をした。應安二年日靜上人の死後その後を嗣いで第五代となり、教化大いに奮つた。在職四十一年の後、應永十六年四月朔日職を日經上人に讓つて滅つた。年時に六十八。

第十二代　日了上人

上人は號を勸行院と言つた。華山家の猶子となつて主位を嗣ぎ、僧正に任せられた。在職中鎌倉上杉家の臣たる太田左衞門太夫持資（有名なる太田道灌）上人の德風を慕つて歸依する事頗る篤く、松永彈正久秀も信心極めて深くして上人の爲めに三光堂を造つた。位にある事十年永正七年八月二十八日逝去。年齡は詳かで無い。

第十三代　日遵上人

上人は號を法性院と言つた。小字は吉壽麿、俗姓は源氏、彼の太田道灌持資の末子である。幼時から日了上人の門に入りて出家し、華山院の猶子となつて本國寺第十三代を繼いだ。文明十八年七月二十六日父持資が逝かつたので香月院春苑靜勝居士の法號を送り、舍兄資康寺を造つて其の靈を祀つた。平河山法恩寺である。在職十四年、大永元年辛巳六月二日に此の世を去つたが、壽は明かで無い。

第十四代　日助上人

上人は號を蓮光院と言つた。華山太政大臣藏原政長の猶子である。大僧都に任じて本國寺の第十四代となつたが、天文五年比叡山の衆徒及び檀越が兵を起し、山に迫つて火を放ち、寺塔を皆燒拂つてしまつたので、上人大いに悲しむで夜の目も寢ずに再興に努め、一擧にして諸伽藍を建直した。在職三十三年天文二十二年七月十四日に入寂した。

第十五代　日栖上人

中道院と號し、華山家の猶子である。大僧都に任ぜられて本國寺の住職を

嗣たが、寺務を執る事僅か四年で、天正十一年四月五日に逝かつた。壽不詳。

第十九代　日廷上人

上人は字を慧哲と言ひ、一心院と號した。幼時中村談林に入り、多年の苦學を積むだ後ち、小室、鷹峯、中村三談林の化主に歴任した。德行頗る高く、律師法橋の位に任じ、終に本國寺の第十九代を嗣いで、居る事十年、元祿三年八月二十日年七十四で入寂した。初め水戸の光國禮を篤くして上人を招いたが、老年だからと言つて赴かなかつたと云ふ。

第二十代　日隆上人

上人は字を春山と言つた。少にして正東談林に入り、學成つて求法談林の化主となり、妙覺寺主に進むだが、後ち水戸光圀の請に應じて赴むき三昧堂の化主となつた。その後今出川右大臣公規の猶子となつて本國寺に住し、大僧正となつたが、光圀又懇ろに賴むで、久間寺の寺主とした。元祿十一年三

月五日、年五十九で此の世を去る。

第二十二代　日從上人

日從上人は字を通心と言ひ、號を信解院と言つた。加賀の國の人で、身延山日奥上人の法孫である。初め瀧谷日遠上人の門人となり、後ち中村談林を經て水戸談林に入りて玄義を講じ、文保談林の化主となつた。紀伊國蓮心寺から、京都の妙覺寺に進み、間も無く本國寺第二十二代の主となつて大僧都法印に任じたが、寶永五年十二月十七日に逝去した。年五十九。

第二十五代　日詮上人

上人字を慧中といひ、日妙院と號した。生國は詳かで無い。初め中村談林に遊學して、松崎談林の化主となり、平賀本土寺の住職を經て本國寺の座主となつた。享保八年五月十一日寂、壽七十九であつた。

第二十六代　日達上人

上人は字を智運、又は智鳩と云ひ、號を了義院と稱した。岩代福島の人である。初め九顯寺十八代日輝上人に學び、鷹峰、六條、中村三談林の化主を經て、大僧都法印となり、學才の譽れ頗る高くして、當時の學僧たる華嚴の鳳潭、天台の靈空等と名を齋しくした。「顯揚正理論」を作つて眞宗の性均の台淨念佛復宗決を破り、書中で鳳潭の說をも攻擊した。鳳潭も乃ち「金剛槌」を作つて大いに日蓮宗を罵つたので、上人又「決膜明眼論」を作つて鳳潭に當り議論一世を動かした。

延享四年二月二十六日寂、壽七十四であつた。

(四) 京都妙滿寺歷代

第一代　日什上人

上人は妙滿寺派の開祖である。父は鎌倉の人で石堂太郎覺知と云ひ、母は會津の城主葦名四郎盛宗の女で清玉姫と言つた。上人は正和三年四月二十八日に會津の若松に生まれ幼名を權太夫國重と言つたが、幼少から時の經史百家の學に通じてゐた。十九歲の時京都の比叡山に登り、慈遍僧正の弟子と成つて名を玄妙と改め、天台を學び止觀を究め、又勉學の暇々には畿內近傍の巨刹を訪ねて諸宗の蘊奧に通じた。三十八歲の時能化職に推選せられ一山三千の學徒を預かつたが、建德二年に職を辭して鄉里に歸り、國守若狹守蘆名貞盛に强ひられてその菩提寺たる羽黑山東光寺主の職に就いた。ある日、高祖が著はされた「開目抄」、「如說修行抄」の二書を讀むでから、直ちに今まで胸に抱いてゐた佛敎上の疑ひが解け、天台宗の非を悟り、慈覺、智證、兩大師の說の謬まつてゐるのを知つて、斷然天台宗を捨てゝ日蓮宗に成り、自から日什と號した。そこで人々上人を狂せりとして、密かに害せんとしたので、門下の高足たる日仁、日金、日妙、日穆、日全、日美の六老僧と共に逃れて下總なる正中山法華寺に入り、日祐上人に見えて高祖の書を色々と讀み、益々

感奮して、一天四海皆歸妙法を實地に見やうとして弘和元年正月京都に行つた。さうして二條關白良基に上奏して、「立正安國論」及び意見書を献じ、諸宗の謬妄を論じたが、間もなく二位僧都に叙せられて、京都弘通の勅命を蒙むつた。然しまだ上奏の意を達する事を得なかつたので一旦鄕國に歸り、翌年諸宗の謗法を鎌倉管領足利義基に訴たへて再たび京都に入り、朝廷の意を伺つたが、矢張り果たす事は出來なかつた。止むなく止まつて法華宗弘通に盡力し、弘和三年の夏再たび天裁を請うた。關白良基大いに上人に歸依して信仰頗る深くなり、元中元年室町將軍に謗法禁遏の旨を訴たへたが、役人が兎角に言を瞬眛にして上人の意思も遂に用ひられなかつた。翌二年遠江國見附驛に一寺を造つて立妙寺と云ひ、そこで日宗上人と會つた。是れより先き、上人が眞間の中山に在つた時、既に諸門流は法理化義を誤まり授受の正統が絶滅してしまつたのを看破つてゐたので、此の時日宗上人に大いにその邪謬を攻めたら、日宗上人は一言も答ふる事能はずして直ちに上人に服した。是れより諸門流の誤謬を捨てゝ眞授日蓮塔中別付の正義が弘通した。之れを一

派開創の紀元とする。即ち師の開宗後六年で、高祖の滅後百六年、上人の年七十二歳であつた。翌元中二年玄義妙立寺を建て、元中五年京都に入つて、六年妙滿寺を開き、一門の本山とした。同八年二月遂に死を決して將軍義滿に面訴したが、矢張り遂に容れられなかつたので、同七月寺を門弟に讓つて京都を發し、途中行く〳〵妙法を弘めて若松に歸り、妙法寺を創立して父母の冥福を祈りながら靜かに餘生を送つてゐたが、元中九年（北朝の明德二年）二月二十八日に入寂した。壽七十九、著作に「治國策前諷誦文」、「後諷誦文」、「置文」等がある。「本化別頭佛祖統記」に日計上人傳がある。彼是參照するに相違する所もあるが、こゝでは顯本法華宗にある所に從ふ。

第二代　日義上人

上人は伊豫阿闍梨と言つて、日什上人の高弟である。始め日妙上人に代つて玄妙寺主となつたが、後師の遺命に依り移つて妙滿寺の第二代となつた。諸種の規模を完備し、總本山の資格を定めたのは皆上人の功である。應永四

年寂、年齢不明。

第三代　日仁上人

上人は宰相阿闍梨と云ひ、初め岩代若松妙法寺の二代となつたが、後妙滿寺三代の位に昇つた。日計上人の滅後、門弟信徒等が離れ〳〵に成らん事を恐れて專ら奬勵保護に策し、應永五年六月五日には法弟日實上人と共に將軍義滿を途に要して、權宗禁止の願ひをした所、義滿怒つて上人を亂打し、その身肉を靡爛せしめた。且つ沸湯を注ぎかけて退かせようとしたが去らなかつたので、遂に慰さめて歸さしめたといふ。以て上人が如何に妙法に熱心であつたかを知り得やう。

應永二十三年歿去、年は詳かで無い。

第七代　日芳上人

上人は攝政鷹司某の子で、幼少の時から親の手許を離れ、日具上人の門に

入つて出家した。後妙滿寺主となり、大僧正に任せられた。天文三年十月一日、年六十三で歿した。

第十代　日遵上人

號を寂光院と言つた。文明年間專ら弘通に力を盡し、諸國に寺院を開く事數十、當時日本で有名な寺々を法華に改宗せしめた事も尠くなかつた。長享六年十月二日寂、年不明。

第十五代　日春上人

上人は號を中道院と云ひ、字は初め是然と言つたが後ち秀感と改ためた。俗姓は清水氏、元和八年二月十六日に加賀金澤に生まれ、八歳にして下總の中村談林に入つたが、時に春山上座小西談林に行つて玄義を講じたので上人も之れに隨つて行つた。後ち三十八歳にして鷄冠井談林の講主となり、尋いで松崎談林の講主に進むだ。寛文五年四十四歳で妙滿寺主となり、四海唱導

師の重任を受けたが、その時中村談林には主席が無かつたので、上人強請されて赴むき、講了つて京都に歸るや伽藍を修繕して大いに壯觀を加へた。寺務を執る事十七年の後席を法弟日空上人に讓つて退隱し、元祿十五年正月二十五日、年八十一歳で逝かつた。

第十六代　日泰上人

上人は號を心了院と言つた。京都白河の人で幼少より佛道に志深く、稍長じて妙滿寺の日遵上人の門に入つた。兩總の地を巡つて布敎に力めてゐる中酒井定隆の信仰を受け、唯一夕の說敎で二總七里の間の人民を法華宗徒とした。所謂七里法華の祖として有名なのは此の上人である。文明年間下總濱野在に本行寺を開き、延德六年京都の妙滿寺に住し、明應の頃再たび住して權大僧都となつた。永正三年正月十九日逝去、壽七十五歳であつた。

第二十六代　日淵上人

上人は號を久遠院と言つた。高僧として譽高く、曾て織田信長が京都に在つた時、上人を請じて法華宗の講義を聽いた事があつた。安土で淨土宗と法論をした時には藏經點檢の任に當つた。後寂光寺を建てゝ、本山に列せしめ、大いに正法の名を揚げた。慶長十四年逝去、年齡は詳かで無い。

第二十七代　日經上人

上人は號を常樂院と言つた。妙德寺に住して權大僧都に任ぜられ、諸國を巡歷して法敵折伏を事としたが、向ふ所敵なしといふ有樣であつた。慶長十三年江戸で淨土宗と法論を開いた際、德川幕府淨土宗學僧の言を容れて、日蓮宗の諸本山に令して經文に據つて念佛無間の本據を出さしめた。上人奮つて之れに答へたので幕府では大いに怒り、上人の師弟を捕らへて梟刑に處した。弟子一人爲めに死んだが、上人は經藏符合すると悅び、刑場で本尊を寫した。血汐の痕が斑々として見る目も慘ましく物凄かつた。世に日經の血曼荼羅と言つて有名なのは之れである。寺を開くこと五十餘ヶ所、元和六年に

死んだが年齢は明かで無い。

第三十代　日純上人

日純上人は日經上人日淵上人等と同時代の人で、宗學に秀で、その衰頽を嘆いて四方に遊化した。後ち上總宮谷に大學林を起し、多くの徒弟を敎へた。元和八年寂、年不詳。

第三十二代　日乘上人

上人は字を乾龍、號を泰德院と言つた。上總國東金の人である。妙滿寺に住して宮谷學校の講主である。嘗つて東叡山寛永寺で、大藏經を閲し、次いで學頭に任せられ、時の大學者たる林羅山と往來して常に論議を上下した。上人が羅山に送つた南天樹の机は今尙ほ殘つてゐる。正保二年四月二十三日卒去、年は明かで無い。著作に「玄義考拾記」十卷、「文句欖剛」九卷、「止觀述聞」五卷、「西谷條例」三卷、「四敎儀集解歷承」一卷、「同誌議集」九卷、「文句述解」、「皆要抄隨覽」、「信行要道儀」、「流通搜源記」、「受不受記」各一卷等がある。

第九十二代　日受上人

上人は號を合掌阿闍梨と言つた。初め宮谷談林に學び、妙滿寺に昇り、專ら宗學に力を盡して一派の宗學を大成した人である。逝去の年月日、年齢共に詳かで無い。

第百九代　日勇上人

日勇上人、字は存道本義院と號す。尾張國名古屋の人で、幼小の時常德寺第十二代日貴上人に從つて得度した。日貴上人は學德高き人であつて門下は四十人以上もあつたといふ。宮谷檀林の南谿に尾州寮といふを起して門下をこゝに寄宿せしめられて居た。上人は其中に參して頭角を顯はし、始めは常德寺塔中忠善院に住され、後に宮谷檀林に入り天台三大部を講究したとの事である。然るに其頃妙滿寺の日受上人は宗乘を以て名高かつたので上人は親

しく行つて教を受け、後江戸下谷蓮華寺の第十一代となり、次ぎに上總松岸寺第十七代となつた、寶暦三年十一月檀林玄義講師に進み、八年八月松の鄉に法席を開いた時は、十日の間に一百座の講演をし、諸方から信者が雲集し上人の名は忽ちにして遠近に聞えた。同年十月本山妙滿寺第百九代の貫主となり、九年十一月任期滿ちてから東に歸り、十年十二月松岸山本松寺で入寂。

(五) 京都妙覺寺歷代

第十代　日住上人

日住上人は號を眞如院と云つた。妙覺寺の日延上人に師事し、その命を受けて本覺寺第二代、妙覺寺第十代となり、後ち兩山を合して一寺となし益々法門を弘めた。晚年紀伊國和歌山に遊び、眞言宗の廢寺を再興して和歌山正

住寺と言つた。文明十八年九月十八日寂、年不詳。

第十七代　日饒上人

號を觀照院と言ひ、尾張國犬山の城主齋藤山城守利直入道道之の子長井義直の弟である。道之自から菩提の爲めにその二子を美濃常在寺の日運上人の許に送つて僧とした。上人はその一子である。初め常在寺の主となつて、後ち妙覺寺主に出世をしたが、犬山城の沒落後は同寺に於て法門を修め、永祿四年に逝去した。世詳缺く。

第十八代　日與上人

上人俗姓も、生國も年齡も詳かで無い。京都の妙覺寺の主となつて內外の學を講じたが、殊に外學に通じて詩文を好くした。後ち佐渡に渡つて塚原の根本寺に入り、日成上人の後を再興して第八代の主となつた。文祿元年七月二十五日寂。

第二十四代　日允上人

上人は字を玄通と言ひ、號を本通院と言つた。父は本阿彌光悅である。上人初め身延山の日遍上人に師事し、中村談林の講主となり、後ち本法寺、法華經寺等を經て、妙覺寺主となつた。父光悅の筆法を受けて書には極めて巧みであつたといふ。年老いてから鷹峯に隱退したが元祿五年の十一月十六日に年七十四で歿した。

第二十五代　日廷上人

上人は字を尊賀と云つたが、後ちそれを又院號にした。伏見宮邦房親王の御子で、出家して京都本滿寺の日遍上人の門に入り、初め飯高談林に、後ち西谷談林に學んだ。間も無く妙覺寺主に出世し、後水尾天皇の信愛を受けられたが、晩年に到り鷹峯の幽栖に隱れて閑寂な生涯を送られた。貞享元年九月九日逝去、御年七十二歳であつた。

（六）安房小湊誕生寺歷代

第十九代日遵上人　上人は號を長遠院と言つたが、鄕國等は詳かで無い。誕生寺の外は、京都の頂妙寺等にも歷任して承應三年十月三日に歿した。著作に「陣迷論」十卷がある。

第十一代日迫上人　上人は字を遵慮、號を寂如院と言つた。京都の生れで立本寺の日芳上人、身延山の日脫上人に師事し、飯高談林に學んで、松崎談林の化主となつた。初め京都の立本寺に住し、暫らく武藏の八王子に隱れたが、再び出て誕生寺の主となつた。元祿十四年七月五日、年六十二歳にて寂。

第二十九代日禎上人　上人字は永順、號は一善院、上總國大楠村に生まれた。壯年の頃玉澤院日雄上人に投じて出家し、飯高談林に入つて玄義の講主となつた。後岡津の妙覺寺に住し、小松原の鋭忍寺に移り、轉じて飯高談林の化主となつたが、遂に小湊の誕生寺主に出世をした。年老いてから、市川の龍潛院に隱れ、天保七年壬寅六月十三日に年七十五を以て入寂した。一生

の間に讀誦した經卷の數は算へ盡くされぬ位で、說法も二千五百座に上つたといふに見ても、如何に法門の爲めに盡されたかゞ知り得やう。

(七) 其他諸刹歷代

武藏國瑞輪寺

第二代日受上人　上人は慧性院と號して、身延山第二十二代日新上人の門弟である。天正十九年、德川家康日新上人を召して江戸城下に停住の地を賜ふたが、その翌元祿元年に死するに及び、上人その遺命を受けて江戸に慈雲山瑞輪寺を建て、自から第二代となつた。慶長元年瑞輪寺火災の爲めに燒失するや、上人甥なる妙傳寺日盛上人を召して職を授けて再興を命じ、寬永四年正月二十七日に逝去した。年不明。

第四代日登上人　上人は了雲院と號して、日新上人の法孫である。慶長九年、第三代日盛上人の囑を受けて瑞輪寺の主となり、寺務を掌どる事二十二年、その餘暇に妙雲寺を造つて晩年をそこに送つてゐたが、寬永二年九月十日に年六十一で死歿した。

第五代日遼上人　上人は字を貞山と云ひ、號を慈眼院と言つた。了顯院日盛上人の門人である。日登上人の後を受て瑞輪寺の第五代となるや、間も無く池上本門寺日樹上人の法亂起り、上人は身延山の日遲上人等と共に力を盡した。年老いてから深川の慈眼寺を造つて退隱し、慶安二年三月二十七日、六十一歲で入寂した。

第七代日體上人　上人は字を叡達、號を通應院と言つた。幼少の時から圓妙院日桂上人の弟子となつて飯高談林に學び、明應二年に瑞輪寺の第七代となつた。平賀の日述上人等不受不施の義を唱ふるに方り、身延山の日境、日尊等諸上人とその破却に力を盡し、前後十五年にして功を全うした。延寶三年三月二十一日寂、年五十三。

第八代日住上人　上人は圓柱と字し、養眞院と號した。甲斐の人である。圓妙院日桂上人の門に入つて出家し、初め飯高談林に學び、後ち西谷談林の請に應じて文句を講じた。延寶二年武藏瑞輪寺の第八代となり、寺務を見る事十四年に及んだが、途中に一度出でゝ飯高談林に經を講じ、後ち又立本院日運、大中院日孝兩上人の二代を經て元祿四年再たび瑞輪寺主となり、翌年退隱して寛永六年三月三十日に入寂した。時に年七十六であつた。

武藏國淨心寺

第一代日眼上人　上人は字を通遠と言ひ、號を卽如院と言つた。幼少の時から世俗の煩さきを厭つて出家し、小西談林に遊學して、將軍家綱の乳母三澤女の歸依を受けた。明暦元年三澤女病に罹り再たび起つ事能はざるを知るや、上人に遺言して一寺を營まれむ事を請うて瞑目した。そこで上人は深川に一の草庵を結んで時の到るを待つてゐたが、間も無く家綱に三澤女の遺言を告げ、遂に幕府の許可を得て一寺を開いた。然るに不幸にして病を得、到

底全快せざる事を知つたので、門人の覺性を召して、その業の繼紹を遺言した後ち逝去した。依つて覺性その遺志を次いで幕府に請ふたので、萬治元年覺性に地祿を賜ひ、三澤女の冥福を祈るためその法號たる淨心院妙宗の字を取つて法苑山淨心寺と名づけ、日眼上人を崇めて開山とした。

第三代日念上人　上人は字を孝存、號を覺成院と云ひ、山城鳥羽の人である。俗姓は山本氏、幼少の頃頂妙寺に入りて出家し、立本寺の日審上人に師事した。後ち關東に遊んで中村談林に入り、學成つて淨心寺の第三代となり、寺務を執る事三十九年、說法二萬餘座に及び、法名を受くるもの數へきれぬ程多かつたといふ。寶永四年七月七日、壽七十四で歿した。

第四代日明上人　上人は字を觀靜院と云つたが、生國、俗姓、年齡等は詳かで無い。淨心寺の日念上人に師事し、上人の歿後その後を繼いで寺務を見る事三十四年、說法一萬餘座の多きに及んだ。死歿の年月日も明かで無い。

第三代朗源上人　上人は俗姓千葉氏、幼少の時字を德壽麿と言つた。十三歳で出家して龍華寺に入り、苦心慘澹業を積む事五年の後ち、日覺上人に從つて化道を輔け、貞治四年には權少僧都に任せられた。永和四年正月十八日寂、年五十三であつた。

第四代日齊上人　上人は字を通源と言つた。俗姓は源氏、貞和九年に相摸國鎌倉に生まれた。十二歳の時京都に來て大覺の主に投じ、翌年剃髪したが、大覺が死んでから朗源上人の門に入つた。明德四年に將軍義滿地を割いて寺に附し、上人寺院を修營して號を改めて妙本寺と云つた。應永十二年十一月四日、壽五十七で寂、著作に「顯廣鈔」がある。

第十一代日紹上人　上人は字を星陽と云ひ、俗姓は平氏、備前金川の人である。初めの名は日韶、後ちに日紹と改めた。最初は下總飯塚に遊學し、中年備前に歸つて蓮昌寺に住したが、後ち日堯上人の後を繼いで妙顯寺主と成り、天正の初め大僧都と成つた。上人は常に早曉に起きて法華經一部を讀誦し、次に題目を唱へ、次に祖業を讀むで晝に成らなければ止めなかつた。元

和八年六月二十五日寂、時に年八十一であつた。

第十三代日饒上人　上人は字を英月と云ひ、京都の人で、俗姓は尾形氏である。幼にして出家し、十六歳にして法輪寺に入り、常に講席に侍して多年研學の後ち、遂に南總小西黌舍で諸部を講じた。武藏の法恩寺で妙玄を講じた後ち元和の初め四十三歳で妙顯寺の主となり、天保元年九月二十二日に年七十二で歿した。

第十八代日耀上人　上人は字を勝光と云ひ、後ち字を號とした。本通院日允上人の門人で、身延山日遲上人の法孫である。中村談林で修學し、鷹峯談林の化主となつて本法寺に遷り、次いで正中山に遷り、中村談林の化主となつた。間も無く水戸黃門光圀に招かれて三昧堂で多くの道俗を敎化し、後ち妙顯寺第十八代の主となつたが、暫らくにして去つて鷹峯の體眞庵に陰れた。元祿十年十一月二十日六十二で歿かつた。

第二十二代日妙上人　上人は字を泰雲と云ひ、南無院と號した。洛陽の人である。初め本滿寺で得度し、十六歳にして中村談林に遊び、玄義を講じて

深草寶塔寺の主となり、松崎談林の化主となつた。後ち頂妙寺に遷つて、終に妙顯寺の主となり、晩年は退いて體眞院で休養した。寶永七年十月十六日寂、年七十三である。

下總國本土寺

第二代日傳上人　上人は日朗上人の門下で有名なる朗門の九鳳の一人である。略傳は前に出て居るから茲には再述せぬ。

第六代日饒上人　上人字は慧海、俗姓は明石氏、初めは天台宗の僧であつた。比企ヶ谷の日山上人の敎へを受けて日蓮宗に入り、後ち平賀本土寺の第六代となつた。正長元年五月六日入寂、年齡不明。

第八代日意上人　上人は字を秀鏡と言つた。俗姓は足立氏、下總八幡庄市川の人である。幼にして佛敎に歸依し、本土寺の日福上人の門に入りて、初め喜多院に遊學し、天台の講義を聞いた。後ち平賀に歸つて宗意を受け、身延山の日朝上人から觀心本尊鈔の口決を受け、文安五年二十八歲で本土寺の主となつたが、檀越曾谷直滿、狩野但馬入道行蓮、信濃入道朗意等力を盡して伽藍を造營した。長祿二年、原能登守胤繼小西の阿彌堂を毀つて法華堂を造營し、妙高山正法寺と稱して上人を請じて開山とした。後の小西談林之れである。市東の光德寺、中野の本源寺、白井庄彌富の長福寺、小山の法宣寺等は皆上人の開山である。古河將軍成氏、上人の德を慕ひ、家臣小笠原左馬之助を遣はして敎化を請うた。上人本土寺に在る事十八年、病を得てから小西の日端上人を招いて席を讓り、文明五年四月九日に逝かつた。年五十三。著作に「八敎攝記」「狂少破圓記」各二卷、「本尊鈔相傳見聞」一卷がある。

下總國弘法寺

第十九代日貞上人　上人は字を存首と云ひ、善慧院と號した。別に練阿とも呼ぶ。伊豆國初島の人である。幼少の時池上本門寺の日玄上人に仕へ、飯高談林に學ぶ事三十年、學名頗る高かつた。後ち敎藏院の席を繼ぎ、南谷に往つて玄義を講じ、やがて弘法寺主の席に就いた。その後飯高談林の請ひを

受けて赴いたが、偶々病に罹つたので退いて眞間山に歸り、正德二年十一月五日に此の世を去つた。上人には有名な著作が頗る多い。

紀伊國養珠寺

第二代日護上人　上人字は順性、號は中止院、丹波國與謝郡の人で、俗姓を市村氏と言つた。十五歳の時得度して京都の本滿寺に遊び、一如日重上人の講授を受けたが、後ち山門、寺門、南都の學席を經て、日遠上人の門に入つた。それより飯高談林に入つて宗乘を研究し、居る事二十年の後ち奮然として衆生救濟の志願を起し、諸州を經巡つて敎化を事としたが、後ち播磨の明石、山城の嵯峨に隱れ、草庵に籠つて專ら讀經唱題に努めた。後水尾天皇上人の道儀を聞き給ひ、勅して朝向閣の佛像數體を刻ましめ、權大僧都に任じ給ふた。仁和寺の法親王山城成瀧に三寶寺を開いて上人を請じ、又正保四年には紀伊侯德川頼宣が禮を篤くして招いたので止むなく和歌山に到つたが、後ち頼宣江戸に下るに及び上人も往きてその母養珠院夫人の供養を受け、且

つその請に依つて妙見菩薩の像を刻むだ。晩年山城國賀茂の佛谷に幽棲し、慶安二年四月十五日年七十で逝去した。後ち頼宣養珠寺を開き、心性院日遠上人を崇めて開山とし、上人を第二代とし、又塔を成瀧三寶寺に開いた。上人は彫刻に勝れて、佛菩薩の像を刻むだもの一萬餘體に及んだといふ。

第四代日存上人　上人は號を觀妙院と言つたが、俗姓や生國は不明である。智道院日明上人の弟子で、心性院日遠上人の法孫である。初め飯高談林で修業して後ち六條談林の化主となり、京都妙滿寺主に出世をしたが、寛文六年紀伊侯に招かれて養珠寺の第四代となつた。寛文十一年十一月七日寂。著作に「指要鈔詳解」三卷、「金山鈔」十六卷がある。

第六代日禪上人　上人は字を宣海稱智院と號し、別に行首とも呼んだ。俗姓は下村氏、紀伊の人である。享保二年十二月二十九日寂、世壽七十九。

第六　諸刹開山略傳

(一)　日常上人（下總本妙法華經寺開山）

日常上人は字を常忍、號を常修院と言つた。俗名は源五郎胤繼と言ひ、下總國葛飾郡八幡庄若宮村を領した。建長元年夏鎌倉に往く途中で高祖に逢ひ、船中に招きまゐらせて法を聞いてから大いに歸服し、建長七年には中山に法華堂を建てゝ屢々高祖を請じて衆の爲めに法莚を開いた。文久十一年に到り高祖法を長興山に開くに當つて五郎は又若宮の邸を改めて寺とし、中山の法華堂を本妙寺と號し、若宮のを法華堂と號したが、後ち合して一寺となし、本妙法華經寺と言つた。後ち母を失つて哀傷に堪へず、高祖に請うて出家して日常と言ひ、江戸淺草山金龍寺主寂海法師を法論の末歸信せしめ、橋場の長昌寺を開いた。弘安五年高祖の入滅後中山に歸り、初めて袈裟を着して沙門と言つたが、正安元年病ひを得て再たび癒えざるを覺り、三月四日法弟日高に後事を托して同月二十日に逝去した。壽八十四。著作に「觀心本尊鈔」、「見聞置文」各一卷がある。

(二)　日祝上人（京都頂妙寺開山）

上人は號を妙國院と言つた。俗姓は千葉氏、應永三十四年下總國千葉郡に生れ、幼名を千鶴麿と言つたが、九歳にして法華經寺第六代日薩上人の門に入りて出家した。文明五年年四十七歳の時京都に行つて妙法を弘めたが、細川治部少輔高益、上人を信ずる事頗る篤く、遂に一寺を築いて上人を招いた。頂妙寺之れである、高益の子高國、高國の子氏綱何れも上人に歸依したので寺内大いに賑はつた。晩年に至り上人和泉の境に隱退してそこを寺となし、永松山頂源寺と言つたが、永正十年四月十二日、年八十六で歿した。

(三)　日榮上人（甲斐本國寺開山）

上人は一に日淨とも言ひ、字を最遥と言つた。京都の人である。初めは天

台宗の學僧であつたが、故あつて佐渡に流され、文永九年の春高祖に謁して弟子となり、改めて日榮と言つた。十一年の春高祖鎌倉に歸らるゝや、上人も翌年許されて身延山に到つて仕へ、晩年になつて本國寺を開いた。年齢は不明、死去の年月日は延慶元年四月十八日とも言ひ、同二日とも言はれて明らかでない。

(四) 日慧上人（上總中山安世院開山）

上人は字、號、生國、年齢皆不明である。中山法華寺の日祐上人に仕へ、同門の日經上人と共に學德の譽れ高かつた。後ち中山に安世院を築いて住し應永三十一年三月十三日に此の世を去つた。

(五) 日惠上人（肥前本蓮寺開山）

上人は號を本陽院と言つた。幼にして肥後本妙寺日眞上人の弟子となり、二十六歳にして本經寺主となり、寺務十四年の後ち退いて長崎に入つた。當

時長崎に耶蘇教が盛んであつたから、上人はその非を鳴らして衆生を佛道に導かんとしたため屢々難に逢つた。幕府その志を稱して寺領を與へたので、上人は之れに住して聖林山本蓮寺と言つた。寺に在る事十四年、寛永十九年十月三十日に年六十三歳で歿した。

(六) 日叡上人（相摸妙法寺開山）

上人字は楞嚴坊、大塔宮護良親王の王子だとの說がある。親王鎌倉の土牢で薨去したまひし後ちは母に賴つて難を逃れ、鎌倉に到つて親王の墓を拜し、後ち本國寺日靜上人の弟子と成つて出家をした。日靜上人が京都に歸つてからは鎌倉に妙法寺を開き、父親王を慕つて讀經三昧に日を送つてゐたが、應永四年十一月九日、壽六十四で逝かられた。

(七) 日榮上人（相摸大明寺開山）

上人は字を大明坊と云つた。相摸三浦の人で、父は平三と云ひ、日朗上人

に歸依して法華平三郎と稱せられ、後ち本國寺の日靜上人に歸依して益々法華經を信じ、遂に宅を寺として大明寺と言つた。上人は卽ち父の命に依つて出家し、同寺の開山として住し、道心極めて堅固であつた。應永八年十一月二十七日に死歿したが、年は不明である。

(八) 日英上人（越中氷見寶德寺開山）

上人はもと眞言宗の僧で圓子房法印照英と言つたが、偶々榮昌院日能上人に逢つて法論の後ち遂に日蓮宗となり、寺を改めて寶德寺と呼ぶに到つた。死去の年月日、年齡共に詳かで無い。

(九) 日圓上人（下總日本寺開山）

上人は字を慧雲院と言つたが、後ち字を院號とした。下總國香取郡飯高村の人で俗姓は推名氏、妙見庄地妙福精舍に入つて出家をした。時に日生上人飯高談林に在つたので、上人も往いて師事したが、日生上人職を辭して京都に歸るや上人の才を愛して、後職の蓮成日尊上人に托した。上人益々奮つて學を勵み遂に主座となつた。應長二年化主日尊上人池上本門寺主となつて去り、法運日遵上人其の後を繼いで化主となつたが、間も無く身延山の座主となつて赴むくに及び後ちの化主決せず、人々の說二つに別れて、一は京都の日重上人を推し、他は上人を推さうとして容易に落着しなかつたので、上人その紛議を厭つて密かに逃れ去り、人知れず中村の淨妙寺に隱れた。上人を慕へる人々之れを聞いて後を追つて來り、上人面責したが去らなかつたので止むなく淨妙寺で講を開いた。飯高中村の兩談林に分れたのは之れからである。德川家康上人を尊むで封を寄せ、別に正東山日本寺と呼んだ。飯高談林の化主日遠上人、上人の德風を慕つて交はり頗る篤かつたが、身延山主となつて去るに當り上人を招かしめたので、上人遂に飯高談林第四代の化主となつた。慶長十年六月四日寂、年僅かに三十九歲。著作に「顯性錄私記」、「金錍論私記各一卷がある。

(一) 日奥上人（不受不施派開山）

上人は安國院と號した。永祿八年五月京都に生まれ、十歳にして妙覺寺の日與上人に師事し、十八歳の時剃髪受戒し、文祿元年師の後を繼いだ。同四年九月、豐臣秀吉が大佛妙法院で千僧供養を營み各宗より各々一百名の僧を招いた際、法華宗の諸上人も皆之れに應じたが、上人獨り不受不施の義を唱へて應じなかつた。同月十五日妙覺寺を退いて丹波國小泉に隱退し、慶長四年德川家康、大阪城に召し千僧會に出席せん事を勸めたが矢張應じなかつたので、五年六月遂に對馬に流された。居ること十三年非常な艱難に會つたが遂に最初の志を飜さず、慶長十七年許されて歸京し妙覺寺に住むだが、寛永七年三月十日年六十三で此の世を去つた。

(二) 日顏上人（山城法華寺開山）

上人號は見性院、生國、俗姓、年齡等は詳かで無い。山城北野に閑居して

譽れ高く、松崎談林に入つて日英上人の下に天台の三大部を研究し、後ち又南部北嶺に遊んで益々研究を積み、頂妙寺の日忠上人、本國寺の日乾上人等と交はつた。鷹峰談林から迎へられたが赴かず、遂に北野の草庵に歿したので、門人日進上人庵を改めて寺とし、法華寺と名づけて上人を開山とした。

(三) 日敎上人（相摸本蓮寺開山）

上人は號も俗姓も生國もすべて詳かで無い。高祖が在京の間その信徒にして門弟となつてゐた。淨本妙蓮夫婦の裔である。本蓮寺は上人の舊宅に造られた寺の名である。

(三) 日玉上人（安房日澄寺開山）

上人は妙隆院と號した。俗姓は工藤氏、俗名は左近の丞吉隆と云ひ、父は小四郎行光と言つた。建長中吉隆鎌倉で高祖に謁して弟子となり、弘長元年高祖が伊豆の伊東に流された時も、信仰怠らず、はる〳〵と遠い配所にまで

高祖をたづねまゐらせた。斯程の熱心な信徒であつたので、翌年、高祖「別頭四恩書」を書いて吉隆に謝された。文永九年、高祖安房の小松原で東條景信に要撃された時、吉隆天津に在りて聞き驚き馳けつけて力戰し遂に戰死をしたので、高祖諡號を與へて僧の禮を以て葬むり、妙隆院日玉上人と呼んだ。後ち吉隆の菩提所の眞言宗なのを改めて法華宗とし、上人を開山として自から第二代となられた。

（四）日完上人（山城學要山勝光寺開山）

上人字を卽要、號を卽是院と言つた。伯耆の人、感應寺日長上人の門人で、身延山日新上人の法孫である。諸國を巡歷して常陸水戸の本行寺、安藝廣島の妙頂寺、若狹小濱の妙光寺に歷任し、說法五千餘回に及んだ。晩年京都に學要山勝光寺を開き、寛文五年十一月二十四日に歿した。壽八十八。

（五）日源上人（能登妙法輪寺開山）

上人は始め哲源律師と云つて眞言宗の僧であつた。永仁中能登羽咋の法輪寺に在つた際、偶々日像上人が同地方を遊行して來たのに遇つて敎を受け改めて弟子となり、日像上人の命に依つて寺を妙法輪寺と改め、且つ日源と改名した。至德三年三月八日寂、壽を重ぬること實に百三十八に及んだ。

（六）日晄上人（和泉堺妙國寺開山）

上人は佛心院と號し、俗姓は伊達氏、天文元年に和泉堺に生まれ、稍長じて長德寺の日沾上人に仕へ、十七歳にして三井の勸學院省會に就て倶舍唯識を學んだ。更に又南都で戒律を學び、南禪寺で禪學を研究し、比叡山の尊契上人に就て天台敎を學んだが、尊契上人、上人の博識を愛して一山の衆徒の爲に講席を開かしめた。そこで人々上人に紫袈裟を贈つてその勞に酬ゐたが、日蓮宗徒で紫袈裟を着するのは上人の時から始まつたのである。弘治元年二十四歳にして頂妙寺の請に應じて赴むき、神道を卜部兼右に學んで、「神道同一鹹味鈔」を著らはし、同三年權僧正に任ぜられた。永祿元年河內國高屋城主

三好義賢入道實義と云へる人、上人を請じて戒を受け安房の地を割いたが、五年五月その臣松永彈正久秀の爲めに弑せらるゝに及ひ、上人城中の男女を率ゐて堺ひに赴むき難を避しめた。同十一年父常吉、廣普山妙國寺を興し上人を開山とした。天正元年織田信長上人を相國寺に請じ厚くもてなし、七年五月二十五日には近江國安土で宗論を催ほした。文保二年中山の日典上人邪計を構へたので上人幕府に訴たへて日典を長門に流し、後ち幕府の命を受けて中山輪次の戒を定め、本法、頂妙、妙國の三寺院交互に中山に住ふこととした。慶長三年八月二十七日年六十七で永眠した。著作に「神道同一鹹味鈔」六卷、「文句無師」（日珖日靜日詮諸上人合著）二十卷、「安土問答記錄」一卷「宗門眞秘要略」「當宗論義抄」「徵安書」各若干卷がある。

（備考）本文中安房とあるは阿波の誤りならん。

（七）日講上人（不受不施講門派開山）

上人は號を安國院と云ひ、京都の人である。十歳の時得度して京都の妙覺寺に入り、專ら宗義を研究して後ち關東の諸談林を歷遊して益々その蘊奧を極め、下總野呂の妙興寺に住した。日奧上人の主唱した不受不施を以て宗義の眞意を得たるものとし、その遺風を慕つて大いに之れを主唱した。時に平賀の日述、日院等の諸上人も、悲田派恩田派と稱して同じく不受不施を唱へたので、上人も之れに和して身延山の日境上人等に反抗した。日境、日豐等の諸上人、寛永七年の前例によつて幕府に訴へたので、幕府は上人等を苦しめんとて寺領の土地、田園等を幕府の供養に懸るものとして、上人等に告げた。上人卽ち「宗正護國章」一篇を書いて幕府に奉り、不受不施の意を明らかにして、寺領の土地田園等は國主の仁惠に依つたもので所謂供養では無い事を辯じたが、幕府その言を用ひず、身延山の日尊上人等の請ひを容れて上人等を審問し、遂に上人を罪して日向の佐土原に流した。上人その地に蟄居する事十餘年、毫も最初の志を變へず、元祿十一年三月配所で瞑目した。壽七十三。著作に「錄內啓蒙」四十卷、「同箇條」六卷、「發心卽到記」、「寢言問答」、「守正護國章」各一卷がある。

(七) 日眞上人（本隆寺派開山）

上人は字を慧光と言ひ、父は中山中納言親通、母は山名伊豆守義時の女である。文安元年三月二十九日但馬に生まれ、十二歳の時剃髪して園城寺に入り、十八歳の時比叡山に登り、二十三歳の時京都妙法寺に入り六代目日具上人に謁して大いに宗義を研究した。それより北越に化を布き、その途中若狹の小濱を經て一寺を造り、慧光山本境寺と言つた。之れを弘宗立義の始とする。後ち越前に赴いて化を施し、攝津に一寺を開き、長享二年には京都に歸つて六角西洞院に本隆寺を開いた。永正の始め職を日英上人に讓り、享祿元年三月二十九日寂した。年八十五である。著作に「三大敎」及び「天親の法華論の科文註釋」がある。

(八) 日眞上人（肥後本妙寺開山）

上人は字を慧性と言ひ、東光院と號した。身延山日乾上人の門人で、京都

妙傳寺の請に應じて第十二代の主となつた。天正十三年加藤清正本妙寺を攝津の難波に築き上人を請じて開山としたが、後ち肥後の國に移るに及び、其封內佛坂に勝地を撰むで本妙寺を遷し、法性山と呼び、後ち星山と改めた。文祿元年清正朝鮮征伐に赴むくに當り、上人も隨ひ往きて蔭ながら護つたので、凱旋の後ち近衞公より後陽成院に傳はり、終に勅によつて紫衣を賜はつた。そこで本國寺大僧正日桓上人、本妙寺を以て九州に於ける一派の首山とした。是れより先き肥前大村の城主因幡守某、上人に就て法を聽き、宗を改めて封內に寺院を造り上人を招いて開山とした。卽ち今の大村本經寺である。その他肥前島原の護國寺、豐後鶴崎の法心寺、肥前府中の妙永寺、本覺寺、川尻の法宣寺、水俣の法華寺等は皆上人の創めたものである。後ち京地に閑居して寛永三年四月二十二日に歿した。享年六十二。

(九) 日順上人（攝津本隆寺開山）

上人の生國、俗姓等は詳かで無い。權大僧都に任ぜられ、京都本滿寺の子

院に寓して、一日靈驗に因つて攝津國上郡上牧村に寺を造り、將軍足利義植から土地を割いて供された。本證寺之である。文永十八年九月十九日寂、時に年八十二歳であつた。

(二) 日順上人(紀伊法恩寺開山)

上人字を兒展と云ひ、俗姓は石野氏、紀伊に生まれた。幼にして甲斐國大野の日性上人の門に入つて出家し、十三歳にして小西談林に入つた。寛文六年、德川光貞その母の菩提の爲めに白雲山法恩寺を紀伊吹上に建つるに及び、上人を招いて主たらしめた。次いで權大僧都に任せられ、遂に開山となり、紀伊一宗の首位を占めた。寺務を取る事十九年の後ち相坂寺、應供寺に庵を結んで退隱し、十七年の閑生涯を送つたが、元祿十三年九月十日に年六十四で死んだ。

(三) 日淳上人(加賀經王寺開山)

上人は加賀の人、父は越前淺倉の家臣上木氏で、上人の妹は高岡大納言利長、小松中納言利光の母である。深く上人に歸依して金澤に經王寺を開き、上人を迎へて開山とした。逝去の年月日、及び年齡等不明である。

(三) 日唱上人(下總唱行寺開山)

上人は首題房と呼び、初め下總富木氏の家臣であつた。初め淨土宗に投じて出家して鋭阿彌と號したが、文應元年高祖が中山で百日說法をした時、聽いて大いに悟つて法華に改宗し、高祖から首題房日唱の名を與へられた。文永十年五月朔日寂、年八十八であつた。

(三) 日精上人(相摸宗延寺開山)

上人は號を三光と云ひ、その生國年齡等は詳かでない。相摸小田原の城下に報新宗延といふ者あり、一寺を造つて、衣食の資と共に上人に供した。上人その誠實に感じて讀經唱題甚だ努めたが、宗延死するに及ひ、上人官に告

げて寺を香花の地となし、報新山宗延寺と呼んだ。身延山に屬す。天正十二年十一月六日逝去。

（二四）日淨上人（京都本瑞寺開山）

上人號を覺性院と云ひ、初め本鏡房と云つた。京師の人で俗姓は磯野氏。初め蘆山寺に入つて天台を學んだが、法華の六難九易の說を讀むに當りて疑ひを抱き、時の妙法華寺主日新上人に質して始て日蓮宗の意を知り、遂に家を燒いて日新上人の門に入つた。覺性院日淨の名は此の時與へられたものである。次いで日新上人の命によつて近江彥根蓮華寺の主となり、後ち伊豆三島本覺寺第十六代主となつた。應長三年本覺寺を退き、一笠一杖心に任せて諸國を遍歷したが、晩年故鄕を慕つて歸り來り、寛永十七年九月九日に年六十七で逝かつた。

（二五）日玄上人（紀伊本久寺開山）

上人は初め日賢と云つた。號は本覺院、阿波の人である。出家して諸國を遊行し、慶長の頃紀伊に遊んで道俗の歸依を受け、本久寺を開いて日夜法華經を讀誦し、一萬一千八百部に至つた。寛永六年三月四日寂、享年五十三。

（二六）日胤上人（下總妙光寺開山）

上人は下總古河の邑主某の子である。幼小にして高祖の弟子となり、晩年下總に一寺を造つて生を終へた。妙光寺之れである。寺中に高祖自筆の大曼荼羅がある。法治元年四月六日、永眠。年不明。

（二七）日心上人（甲斐長遠寺開山）

上人は久成院と號した。小室日傳上人の俗弟で、元眞言宗の僧で大心房阿闍梨と言つたが、途中日宗に改めたのである。寺は加賀美濃守遠光の祈願所であつたが、家兄日傳上人宗を改めて身延山に行く際俱に隨つて往き、高祖に見えて敎を聞いてから、衣を更へ宗を改めて寺に歸り、かくと檀越に

告げて檀徒をも改宗せしめると共に、寺をも慧光山長遠寺と號した。康永二年九月二十一日、年八十八で歿した。

(二六) 日曉上人（安房鏡忍寺開山）

上人字を鏡忍と云ひ、幼少の時から常に高祖の傍に侍つて奉仕頗る篤かつた。文永元年十一月十一日、高祖安房の小松原で東條景信の厄に逢ふや、上人之れを禦がんと欲して難に死し、檀越工藤吉隆も同じく死んだ。吉隆の子日隆上人その地に寺を開いて鏡忍寺と呼び、上人を尊とんで開山とした。

(二七) 日樹上人（江戸長遠寺開山）

上人は號を長遠院と言つた。俗姓も生國も詳かで無い。初め池上本門寺、比企ヶ谷妙本寺の主となつた。寛永五年安國院日奥上人の不受不施の義に賛して之れを主張し、同年德川秀忠の夫人淺井氏葬禮の際、身延山衆が布施を受けたのを見て痛く攻撃した。時に中山法華經寺の前住日賢上人、小西談林の日領上人、正東談林の日充上人、平賀の日弘上人、碑文谷の日進上人等四方に呼應したので勢力なか〳〵侮るべからざるものがあつたので、身延山の日遅上人等大いに憂ひて、日乾、日遠、日遼等の諸上人と謀り、異議邪義の名の下に幕府に訴たへた。幕府卽ち命を下して寛文七年二月二十一日兩方の對論を開かしめた。受布施派は身延山前住日乾上人を初めとして、日遠、日遅、藤原の日東、玉澤の日遵等の諸上人、不受不施派は日樹、日賢、日弘、日領、日進、日充等の皆上人で烈しい對論の末、遂に受布施派の勝ちとなり、爲めに不受不施派は皆追放されて、上人も四月某日信濃伊奈郡にお預けとなつた。寛文七年五月十九日配所で逝かつたが年齡は不明である。著作に「留意要」三卷がある。

(二八) 日寂上人（武藏長昌寺開山）

上人はもと天台宗の僧で寂海法師と呼んた。淺草金龍山の別當であつたが、弘安二年夏徵行して身延山に登り、高祖に見えて戒を受け日寂の名を賜はつ

た。弘安九年十一月一日寂。門下の本覺坊日增、河内坊日可等の諸上人一寺を造つて長昌寺と云ひ、上人を開山とした。

(三) 日秀上人（京都本滿寺開山）

上人は字を觀隨と云ひ、玉洞妙院と號した。近衞關白從一位在僕射道嗣公の男、母は瀨尾氏で、上人は永法三年に生まれた。八歳にして本國寺日傳上人の弟子となつたが、後ち父道嗣その別莊を割いて一淨室を造り、上人を召して法華を講せしめた。名聲次第に世に聞こゑて來たので、帝詔して僧都となしたまひ、京都に一寺を起して廣布山本滿寺と言つた。寶德二年五月八日、年六十八で逝去した。

(三) 日秀上人（山城墨染寺開山）

上人字は純志、甲斐國巨摩郡の人で、身延山第十八代妙雲院日賢上人の弟子である。和歌に巧みであつた。豐臣秀吉の姉、武藏守一路の室瑞龍夫人、

日賢上人を信ずる事深く、爲めに上人も伴はれてよく京都に往つたので、當時和歌の名人として聞こゑてゐた幽齋、紹也と交るを得、滯留の間墨染櫻の舊跡を訪うて相俱に語つた。秀吉之れを聞き、上人を召して貞觀寺の由緣等を語り、且つ墨染の地を割いて一寺を作り上人に賜ふた。黑染寺之れである。その後も時々秀吉に招かれ、遂に大僧都の位にまで昇つたが、秀吉の歿後本國甲斐に歸つて兩親の菩提を弔らひ、天和七年七月十七日五十七で逝かつた。

(三) 日宗上人（甲斐遠光寺開山）

上人は字を宗明と言ひ、甲斐の人で、俗姓は武田氏、俗名を三郎光行と言つた。父遠光深く佛を信じて榮西禪師に歸依したので、その歿後父の菩提を弔ふ爲め一寺を作つて榮西の徒を住ませた。文永十一年、高祖身延山に隱るるに及び、その檀越波木井實長は上人と親戚の間柄だつたので、上人も屢々高祖に見え、遂にその德に服して出家し、寺をも供した。高祖之れが爲めに特に經字塔を造つて與へ、山を寶塔山と呼ばしめた。遠光寺とはその後ちに

付けた名である。正應四年四月五日寂。年不明。

(三四) 日親上人（京都本法寺開山）

上人は號を久遠成院と言つた。上總武射郡植谷村の人で幼名を菊麿と言ひ、十四歳の時中山法華經寺の日遥上人の門に入つて出家した。十九歳の時西海松尾山總導師職となつたが暖衣高眠に安んせず、遂に中山に歸つて、尸陀林の中で蚊や蚋に咬まれながら毎夜一百遍づゝ百日間自我偈を誦し、次に一日に一爪を拔き、十日に十爪を拔き盡くして熱湯に浸し痛苦を忍んだ。應永三十四年京都戻橋の畔に傘を立てゝ權敎を折伏し、檀越が建てゝくれた一乘寺に住居して、「立正治國論」を作り、將軍に諫言した。將軍義敎大いに怒つて上人を捕らへ、獄に繫いで灸火、鞭笞、熱湯、冷水等手を換へ品を換へして攻めたが、志堅くして屈しなかつたので、更に串を以て陰莖を刺し、鍬を燒いて脇に着けた。上人莞爾として更に恐れず、自ら稱して法樂としたので、義敎益々怒つて、鐵を以つて舌を拔き、活火に鍋を燒いて頭に冠したが、上人は更に〳〵動かなかつた。鍋かぶり上人の名ある所以である。嘉吉元年三月義敎責めて曰く、「我れ法華の侍者を責むる。定めし此の世で罰を受けるだらう」と。上人答へて曰く、「三年を出でまい」と。義敎聞いて、「三年とは寛大すぎる、」と言つて笑つたので、上人重ねて、「然らば百日に縮めて見せよう」と。果してその言の如くその年の六月二十四日に義敎は赤松禪祐に弑された。檀越狩野修理入道叡昌財を投じて寺を造り、上人に奉つて叡昌山本法寺と言つた。長享二年九月十七日、年八十二で歿したので、鳥部山に塔を作つて全身を葬むつた。是れ本壽寺である。上人が開いた寺は、此の他にも極めて多い。著作に「折伏正義抄」、「植谷抄」、「傳燈抄」、「一生修行鈔」、「本尊鈔相承」、「本法寺儀起」、「御祈禱經鈔」、「立正治國論」各一卷がある。

(三五) 日政上人（山城深草瑞光寺開山）

上人字は元政、號は妙子、別に泰堂、空子、幼子、不可思議等の名がある。元和九年二月二十三日京都一條に生まれ、初めは石井八郎元政と言つた。九

歳の時建仁寺大統院に遊びて九嚴和尚に謁し、後ち近江彦根に行つて、城主井伊直孝に仕へた。時に十三歳であつた。天性山水を愛して屢々京都に入り、泉涌寺に雲龍院如周が法華經を講ずるのを聞いて發心し、二十三歳の時役を止めて妙顯寺の日豐上人の門人となつた。後ち中正寺日護上人、立本寺日審上人、本法寺日德上人等に學んで、一宗の秘奥を極め、明暦元年山城深草に草庵を營みて竹葉庵と稱し、父母を迎へて孝養した。萬治元年父元好が死んでから、その喪を終へて翌年七十九歳の母妙種を連れて身延山に詣で、歸つて草庵に佛殿等を開き、深草山瑞光寺と號した。上人自から開山となり、法華修樂の道場として門下の直翁を上席とし、相共に修行を事としてその餘暇に詩歌などを樂しむでゐた。又明陳元賢に交はつて詩の贈答をなし、「元々唱和集」といふ著もある。その他、熊澤蕃山、北村季吟等の當時の學者と交はり深かつた。寛文七年十二月母の喪を終つて攝津高槻に行つたが、翌八年正月病ひを得て再たび治せざるを知つたので深草に歸り、門下日燈上人に後を托して二月十八日に瞑目した。時に年四十六であつた。遺骸を稱心庵の傍らに

葬むつて、竹兩三本を植ゑて墓表とした。辭世の歌に曰く「鷲の山常にすむてふ峯の月かりにあらはれかりにかくれて」と。上人存生中校訂著作せるもの頗る多く、「校訂訓點天台三大部輔正記」、「大智度論」、「涅槃會疏」、「法藏珠林」、「釋門章服義」、「喪中卽全集」、「寶物秘藏錄」各六卷、「小止觀鈔」、「龍華傳鈔」、「本朝法華傳」、「釋門孝傳」、「龍華歷代師承傳」、「扶桑隱逸傳」各三卷、「元々唱和集」二卷、「衣裏寶珠鈔」、「釋氏二十四孝」、「身延山七面記」、「身延山紀行記」、「溫泉遊草」、「稱心病課」「草山要路」、「草山和歌集」、「食醫要編」、「以空上人方丈記」、「都土產」、「霞谷法語」、「題目和歌鈔」各一卷等がある。

（三六）日全上人（越中妙園寺開山）

上人號を信命院と言ひ備前の人である。出家して北國に遊び、高岡の妙園寺金澤の妙園寺・富山の妙園寺を開き、苦學難行を積むだ末、寛永元年正月一日神通川の上で二十一日間の斷食讀經を終つて水に入つて此世を去られた。

（三七）日遷上人（越中蓮乘寺開山）

上人は初め眞言宗の僧で能登石動山に住してゐたが、偶々越後に遊び日印上人の敎を受けて日蓮宗に成つた。即ち越中國射水郡稻積村に草庵を營み、後ち越中氷見に遷つて眞至山蓮乘寺と號した。嘉曆二年三月一日寂、年不詳。

（三八）日忠上人（紀伊本廣寺開山）

上人字を考夙、號を正考院と言ひ、京都立本寺日審上人の門下である。後ち紀伊熊野新宮の法輪山法華寺に住したが、延寶元年同寺を改めて慧雲山本廣寺と言つた。其他名草郡直川村千手寺に役行者の舊蹟を起して本惠寺と改めた。正德二年十一月年七十一で逝かつた。

（三九）日忠上人（常陸久昌寺開山）

上人は字を通心、號を禪那院と云ひ、甲斐國巨摩郡三子澤の人である。俗

姓は佐野氏、幼少の時身延山第十七代日新上人の門に入りて出家し、飯高談林に學んだが間もなく日新上人が逝いたので日遠上人の門に入つた。苦學年を追うて次第に名現はれ、紀伊侯の養珠夫人に信ぜられて衣食の資を給せられ、遂に玄義の講主となつて小西談林で文句を講じた。初め京都の頂妙寺を嗣いで、下總の法華經寺主に出世し、寛永元年請に依つて再たび飯高談林の講主となつた。六年眞間山の主席となつた時中村談林の化主日賢上人の學德頗る高く、上人もその名を慕つて交りを結んだが、偶々不受不施の異議に依つて日賢上人配流さるゝに及び、上人も平生これと交はり深かつた爲め嫌疑を蒙むつたので、世俗の煩さゝを厭うて幽棲した。逝去したのは萬治三年十月十六日であるが、世壽は詳かで無い。上人の死後、水戸光圀、その母靖定夫人の爲めに久昌寺を造り上人を仰いで開山とした。著作に「帶現記」、「西谷名目解」等がある。

（四）日忠上人（筑前勝立寺開山）

上人は號を唯心院と云ひ、初め京都妙覺寺に在つたが、後ち西國に下つて專ら宗風を弘めた。慶長八年四月二十五日筑前博多の妙典寺で耶蘇教のイルマンと對論して二宗の優劣を爭つたが、論に勝つて大いに名を揚げた。福岡藩主黑田長政その功を賞して福岡橋口町に土地を與へ、一寺を造つて勝立寺と號した。上人が死歿の年月日、年齡は詳かで無い。

（四）日澄上人（伊豆本立寺開山）

上人は字を啓運と云ひ、圓妙院と號し、別に一如房とも呼んだ。鎌倉の如法寺に住し、次いで啓運寺を興したが、後ち伊豆江川氏の請に依つて仁良山本立寺を開いた。學德共に勝れて高かつたので、名刹の請があつたが世の浮華輕薄を厭つて赴かなかつた。永正七年二月九日寂、年齡は詳かで無い。その數多い著作の中今迄殘つてゐる者に「法華啓運鈔」五十五卷、「助顯唱道文集」七卷、「法華神道秘決四卷、「註畫讚」、「日出退隱記」、「本迹決疑鈔」、「嘉會宗義鈔」各二卷、「法界一念鈔」一卷、「本迹決要鈔等數十卷がある。

（五）日長上人（伯耆感應寺開山）

日長上人は號を圓覺院と言つた。甲斐巨摩郡の人である。幼少の時慈雲院日新上人の門に入りて出家し、學成つてから京都妙華寺の主となつたが、間もなく甲斐小室德榮山第十七代の主となり、尋いで駿河感應寺第十一代の主となつた。檀越にして中村式部大輔一氏の家老たる權田內膳村政、上人を遇する事頗る篤かつたが、一氏の子忠一伯耆に封ぜられて赴むくに及び、村政も又從ひ往きて米子府の傍らに勝地をトして一寺を造り上人を招いた。上人往いて佛殿僧房を開き、感應寺と號して、日向上人を開基とし、日朝上人を第二代に推し、自ら第三代となつた。慶長八年十一月村正城中で死んだので上人厚く之れを葬むり、翌年出雲に遊んで啓雲山慈雲寺を築き、本師日新上人を推して開山とした。慶長十六年五月十三日寂、壽を重ぬる事九十有餘歲に及んだといふ。

(四三) 日珍上人（越中本叡寺開山）

上人は字を正啓阿闍梨と呼んだ。元は天台宗の僧であつたが後ち日蓮宗に歸依し、本蓮寺の日宗上人本國寺の日傳上人等に仕へて宗義を究め、越中に佛眼山本叡寺を開いた。寂年月日不明。

(四四) 日祥上人（山城鷄冠井談林開山）

日祥上人は字を梅山と云ひ、通明院と號した。京都西陣の人その姓氏は詳かで無い。初め鷹峯談林に入つて多年の研究を積むだ後南都に遊び、こゝで唯識や戒律を學んでから鷹峯談林の化主となつた。承應三年鷄冠井の眞經寺の荒廢したのを悲しんで談林を開いて敎授したが、それから德風四方に傳つた。晩年に到り紀伊の感應寺に退隱して、寛文十八年八月十日年六十六で歿した。

(四五) 日生上人（飯高談林開山）

上人は字を慧敎と云ひ、經藏院と號した。俗姓は鳥居氏、播磨の人である十一歳の時京都の立本寺の善住院日經上人に師事し、後ち備前の岡山に遊んで蓮生寺に住まつた。間も無く京都の松崎僧都谷に庵を結んで天台の三大部を熟讀し、本國寺の權僧正日禎上人に謁してその指圖で比叡山に登り、日禎上人の徒文甫、上總飯塚の僧要行等と共に日々講席に連なつた。要行學成りて國へ歸り、講席を開いて飯塚談林と呼んでゐたが、上人之れを聞いて往つてその業を助けたので、要行大いに喜んで、死する時上人に與れ〳〵も後を賴むだ。時に飯塚の異端の人々黨を結んで上人等を迫害したので、上人もその地を去らうとした時、飯高の城主平の某上人を妙福寺に招いた。そこで上人も快く同寺に止まつてそこに談林を開いた。飯高談林卽ち之れで、後世、日蓮宗の講經の初祖と言はれてゐる。後ち京都に歸つて松崎談林を開いたが備前の蓮昌寺から招かれたので、遂にその請に應じて赴むき、晩年には立本

寺第九代の主となつた。文祿四年七月二十四日歿、年四十三であつた。

（四二）日得上人（江戸善立寺開山）

上人は字を壽仙と云ひ、後ち字を以て院號とした。初め三河國岡崎善立寺第七代の主としてあつた時、德川家康も亦岡崎に在つて上人を信ずる事最も深かつたので、江戸城に移るに及んで上人も從つて江戸へ行き、下谷に地をトして寺を建て、大光山善立寺と言つた。逝かつたのは元和五年四月某日、年は不明である。

（四三）日得上人（佐渡妙宣寺開山）

上人は阿佛房と呼び俗姓は藤原氏、俗名を遠藤左衞門尉爲盛と云ひ、その先祖は遠藤武者盛遠、卽ち文覺上人である。爲盛初め順德天皇に仕へて從四位上に叙せられたが、承久三年天皇佐渡に流され給ふた時隨ひ往き、仁治三年天皇崩御の後妻と共に髮を剃つて陵の傍に庵を結び、自から阿佛房と稱し

てゐた。かくてある事三十年の後ち、文永八年の冬高祖流されて佐渡に來たり給ふや、阿佛房は念佛信者であつたから高祖を攻めるつもりでその配所を訪ふたが、遂に高祖の說に服して妻と共に熱心な法華經信者となつた。同十一年、高祖許されて鎌倉に歸り、次いで身延山に退き給ふに及び、阿佛房は遠路を厭はず再三再四はる〳〵と訪ねまゐらせた。殊に弘安元年の秋年九十にして登山した時には高祖もさすがに感心されたといふ。日得の名はその時與へられたものである。翌二年三月二十一日入寂、年は不明。

（四四）日傳上人（甲斐妙法寺開山）

日傳上人は肥前阿闍梨と云つた。初めは眞言宗の僧であつたが、多年高祖の敎へを受けて遂にその弟子となり、身延山に草庵を結んで自から醍醐と呼んだ。後ちその地を名づけて醍醐谷といふ。今の志摩房はその舊跡である。乾元元年二月十二日寂、壽は詳かでない。

(四九)　日長上人（紀伊妙臺寺開山）

日長上人は俗名を貞昭と云つた。父は伊賀國壬生野城主、伊勢平氏に與して志を得、紀伊國の多田に逃れて、法華經を讀誦した。上人も從つて日蓮宗に信心厚く、文永中鎌倉に赴むいて日朗上人に從つて出家し、後ち父の遺跡を寺として妙臺寺と云つた。死去の年月日等全べて明らかでない。

(五〇)　日長上人（山城道入寺開山）

上人字を道入と云ひ、俗姓は服部氏、攝津の人である。世の中の榮利を厭つて出家をしたが、二十二歳の時靈夢に感じて、日緣上人に傚つて百日間海中で苦行をした。又四條河原で石を拾つて法華經を寫し、雲母坂の不動堂で斷食して晝夜苦行を積むだ。後の人その苦行の地に寺を造つて道入寺と云つた。寂せる時年六十二であつた。

(五一)　日貞上人（下總法宣院開山）

上人の字、號、生國、年齡等は何れも不明である。初め日高上人の弟子となり、學行が成つてから後ち日祐上人の賴みを受けて松尾山西海總導師職となつた。晚年中山に法宣院を建てゝ餘生を送り、應安二年九月十三日に此の世を去つた。

(五二)　日貞上人（山城本妙寺開山）

上人は字を學珠と云ひ、號を智靜院と云つた。京都の人、幼少の時に慧光寺の日高上人の門に入りて出家し、飯高談林に學んだが、日音、日香等の諸上人と並び稱せられて學名高かつた。後ち山城北岩倉に本妙寺を建てゝそこで歿した。寂年月日、年齡等不明。

(五三)　日念上人（京都法華寺開山）

上人は號を善立院と云つた。京都東寺門前に法華寺を造り、讀經を事としてゐたといふ外、一切明らかで無い。

（五四）日能上人（越中大法寺開山）

日能上人は號を榮昌院と言ひ、京都本國寺第九代日曉上人の門人であつた。北陸地方を巡教して越中礪波郡高岡に一寺を築き、海秀山大法寺と言つた。長享二年十月二十五日寂、壽七十六を重ねた。

（五五）日福上人（武藏承教寺開山）

上人は字を叡順と云ひ、圓琳坊と號した。俗姓は天野氏、平賀日饒上人の門下である。學成つてから日饒上人の賴みを受けて平賀本土寺第六代となり、職に在る事二十三年の後ち退いて江戸に隱居所を築いたが、幾許もなく病に罹り、寶德二年十二月二十日、年七十二で歿した。時に法壽房日圓といふ者上人の隱居所を寺とし、上人を崇むで開山とした。卽ち二本榎承教寺である。

（五六）日入上人（山城平樂庵開山）

上人は字を元信と云つたが、生國や年齡等は詳かで無い。山城の深草に平樂庵を築き、教務のひま〳〵に詩文を弄んで此世なき樂としてゐた。世に上人と元政、元賛の三人の唱和を三元唱と云つて有名である。天和二年六月十日寂。

（五七）日命上人（甲斐常住寺開山）

上人は字を不惜と云ひ、後ち字を以て院號とした。俗姓は鹽野氏、甲斐國山瀨郡鶴瀨庄の人である。夙に出家の志があつたが父が許さなかつたので思ひ止まつてゐる中に、やがて父が歿したので母と共に出家をし、母は妙立日修と稱し、上人は鰍澤春光院の日現上人の弟子となつた。後ち僅かの土地を得たので七面明神を勸請し母と共に讀經唱題に努めてゐたので、中山法華經寺の日允上人その行ひを賞して鶴瀨山常住寺の名を與へた。一萬部の讀經を

終つてから靈夢に感じたので更に一萬部を積み、且つ題目七字を寫すに、一花一香一字三禮毎字自我偈一遍を踊し一萬幅に及んだ。後ち身延山奥の院の殿司となり、その間三年にして讀經三千五百部に及んだ。享保十四年九月二十八日六十三で歿した。上人又詩歌に巧みに「身延山人景詩」がある。

(五六)・日孟上人（山城秀典寺開山）

上人は字を秀典と云つた。山城國山科に幽居し法華三昧を事とし、若狹の妙眞道人に書法を學んで法華經を寫した。門人その經を刻して秀典本と云ひ、且つその幽居の草庵を秀典寺と云つた。

(五七)日門上人（常陸妙光寺開山）

上人は一乘阿闍梨と云つた。その俗姓、年齢等は明らかで無い。常陸國築地に妙光寺を開き、後ち陸奥國宮城郡に光明山大仙寺を開いて、承仁四年七月二十日に逝かつた。

(五八)日辨上人（下總妙興寺開山）

上人は越後阿闍梨と言ひ、駿河國富士郡の人である。俗姓は源氏、熱原甚四郎國重の長子である。初め富士山麓なる眞言宗の寺瀧泉寺の學頭であつたが、高祖の敎へを聞いて大いに感じ、身延山に登つて弟子となつた。高祖名を與へて日辨と呼んだ。弘安四年駿河賀島に蓬壽山常諦寺といふ寺を開き、後ち上總に鷲山寺を開き、下總に妙興寺を開いた。晩年更に甲斐に定榮山遠照寺を開き、相摸に關本山弘行寺を開いたが、應長元年の夏病ひを感じ、少納言日源上人を召して鷲山寺を授け、法弟下野阿闍梨日忍上人を招いて妙興寺を托し、閏六月二十六日に歿した。年齢は詳かで無い。

(六一)日祐上人（山城眞如寺開山）

上人は字を玄慧と云ひ、收玄院と號した。攝津難波の人である。幼少の時寂遠院日通上人の門人となり山科談林に學んだ。後ち東山談林の講主に招か

れたが固く辭退して出でず、深草の日燈上人の風を慕つて霞谷に隱れ、日燈上人と親しく交はつた。晩年眞如寺を開いて主となり、多くの門下を養つた。正德四年六月十九日唱題正念辭世の偈を書し、七十五歳を一期として逝つた。

（㐂）日祐上人（下總小西談林開山）

上人は字を慧澤と云ひ、通王院と號した。日生上人の門に入つて飯塚、飯高の兩談林に隨ひ往き、具さに宗儀を極めた。天正中平賀の日悟上人小西談林を構へて上人に相談したので、上人往いて敎化に力めた。家康之れを聞いて、飯高、中村、小西に同時に封を分ち護法の印を賜ふた。慶長七年京都の立本寺から上人を切に招いたので、止むなく講職を讓つて赴むき、居る事五年の後ち慶長十一年十月六日に此の世を去つた。年不明。

（㐃）日勇上人（山城山科談林開山）

上人は字を天慧、號を法性院と言つた。俗姓は平氏、西洞院參議時直の子で、幼名を梅松麿と言つた。身延山日要上人の弟子となつて竹の房に留まつたが、學成つてから京都妙傳寺の請ひを受けて同寺の主となつた。後水尾天皇に召されて、東福門院で法門を奏上し、後ち宇治郡山科に談林を開いて了光山國護寺と言つた。慶安三年十一月二十三日入寂、壽四十七歳。門下に寂遠院日通上人等があつた。

（㐄）日陽上人（紀伊感應寺開山）

上人は正覺院と號し、圓覺日長上人の高弟で駿河國感應寺の第十三代である。紀伊侯夫人養珠院が剃髪をした時には、上人その戒師となり、元和五年に子の頼宣が紀伊に封ぜられた時、上人も亦隨つて往つた。頼宣の夫人上人を信ずる事頗る篤く、自から地をトして感應寺を建て上人を開山とした。茲に於て常住山感應寺が駿河、伯耆、紀伊の三國に出來る事となつた。上人は寛永二十年十一月九日年六十八歳で歿した。

(壹) 日養上人（越中法光寺開山）

上人は了覺院と號した。天正十三年越中礪波郡高岡に一寺を造り、本照山法光寺と言ひ、教化極めて盛んであつた。晩年閑居して自行轉讀一萬餘部。慶長元年九月十五日年八十一で此の世を去つた。

(弐) 日理上人（加賀本是寺開山）

上人は號を本是院と言つた。中村談林、鷹峯談林に學を講じて後ち加賀に入り、濟生山本是寺を開いて、明暦元年十二月一日歿かつた。俗姓、生國、年齢等皆不明。

(壱) 日隆上人（八品派開祖）

日隆上人字を深圓、精進院と號し、談林房と呼んだ。越中の人桃井左馬頭尙儀の子である。上人の叔父の日存、日純の兩上人共に妙顯寺の日霽上人の門人であつたので、上人も二人を美むで出家の念を起し、遂に日霽上人の門に入つた。二十二歳の時師の上人死去し、日存日純の兩上人共に本迹勝劣を唱へて妙蓮寺を開いたので、上人も二人に從つたが、後ち兩人共日明僧正の說に服した。上人獨り從はず、勝劣を唱へて本能寺を造つて住し、又攝津の尼ケ崎に本興寺を開いて弘通接度をした。後ち甲斐の立正、駿河の興長兩寺の主たる本果院日朝上人京都に上つて上人に謁し、共に勝劣の說を唱へたので、應ずる者も又多くなつた。寛正五年二月二十五日寂。年八十一であつた。

(六) 日隆上人（伊勢延命寺開山）

上人は號を通明院と言つた。駿河の興津に生まれて日遲上人の門に入り、苦行を積みて修驗術を得た。桑名城主松平定重病むに方り、上人の祈禱を請じて治癒したが、後ち定重の父歿してからその菩提を弔らふ爲め光德寺圓妙寺を造つて上人を開山とした。後ち定重の奏請によつて權律師に任ぜられたが、晩年江戸に歸つて谷中に庵を結んで居た。寶永七年二月二十四日年七十

九で歿した。

(六) 日了上人（甲斐妙了寺開山）

上人は中道院と號して、甲斐國巨摩郡相俣村の人である。文永十一年高祖鎌倉を去つて身延山に入られんとして相俣村に暫らく休まれたが、その折上人の父、庄左衞門なる人午餐を奉つた縁故で、父の死後、母は上人を懐ろにして身延山に到り高祖に托し、母も尼となつて妙了日佛と言つた。弘安五年高祖が入滅されてからは母の生地中野村に歸り、後ち相俣村の舊地を寺として正慶寺と言つた。その後弟子の日勢上人地を一の瀬村に變へて妙了寺と改め且つ中野村に體顯山妙行寺、妙久山法久寺を造り、上人を推して開山とした。示寂の生年月日、年齢等は不明である。

(七) 日善上人（常陸大法寺開山）

上人は大法阿闍梨と呼び、北條義澄の嫡孫、濱名次郎光成の男である。幼少の時から世塵を厭つて日朗上人の門に入り、大法房日善と言つた。間も無く常陸に安中山大法寺を築いて住むだか、後ち比企ヶ谷に歸り、正和四年碑文谷の日源上人を招いて第二代の主とした。上人時に年五十三であつた。元應二年の春、日朗上人の喪に逢つて比企ヶ谷の傍らに實成寺を構へ喪に服する事三年。元享の夏京都に赴むいて日像上人を龍華院に訪ひ、五畿の間の舊跡を巡つた。然るに檀越が新たに寶國寺を築いて上人を請じたので、上人止

應元年、富木五郎が法華堂を造つて高祖を請待し、高祖が其所で百日の説法をした時に、教信聞いてその教へに服し、遂に舊宗を棄てゝ法華になつた。後ち身延山に行つて出家し、名を日禮、字を法蓮と云つて曾谷に小さい庵を造つて讀經唱題に世を送つた。法蓮寺とは後ちにその庵を寺として付けた名である。延應四年五月五日壽八十餘で歿した。

(八) 日禮上人（下總法蓮寺開山）

上人は字を法蓮と云ひ、姓は平氏、俗名は教信、總州の曾谷に居た。文

むを得ずして止まり、後ち碑文谷に遷つて元弘元年九月二十二日に年七十で逝去した。

(十三) 日妙上人（尾張法蓮寺開山）

上人は法淨院と云ひ、甲斐國羽切村の人である。俗性は畠山氏。十八歳の時身延山日朝上人の下で出家をしてから、後ち諸國を經巡り、明應元年の春尾張を經て葉栗村に宿つた。村民相見て上人の德に懷き頻りに上人を止めたので、上人喜んで留まつて敎化をし一寺を開いた。日朝上人之れを聞いて妙王山法蓮寺の號を與へた。文龜二年七月十三日永眠したが年は詳かで無い。

(十四) 日隆上人（安房鏡忍寺第三代）

上人は字を鏡榮と云ひ、刑部阿闍梨と呼んだ。二條左近丞吉隆の子である。初め父の吉隆高祖と約束をしたので投じて弟子となり、父日玉上人が難に死せる地に一寺を造り、日曉上人を推して開山とし、日玉上人を第二代とし、

自から第三代となつた。初めは妙隆寺と云つたのを後ちに鏡忍寺と改めたのである。建武元年十月朔日年七十で歿した。

(十五) 日祐上人（相摸妙法華寺第二代）

上人は字を智祐と云ひ、大貳阿闍梨と呼んだ。比叡山無動寺第五代尊海上人の弟子であつたが、正安二年、日昭上人が尊海上人を京都に訪ねた時、師の命を受けて衣を更へて法華宗と成つた。文保元年、日昭上人が那瀨の妙法寺を退いて相摸の海濱に遷り、妙法華寺を建てゝ日祐上人を主たらしめた。正慶、建武の間鎌倉大いに亂れて濱の寺も燒失したので、上人僅かに高祖の手書及び肉牙、日昭上人の手書を頸に掛けて池上に逃げた。次いで伊豆雲金村に東金山妙本寺を建てゝ居る事二十餘年、戰亂未だ治まらずして濱の重寶を移さうとして移し得ない中に、貞治元年正月十四日に歿した。年齡不明。

(十六) 日滿上人（佐渡妙法寺第二代）

上人は豊後阿闍梨と呼び、阿佛房日得、卽ち遠藤左衞門尉爲盛の子で、俗名は九郎盛綱と云つた。延長七年佐渡に生まれ、文永七年高祖佐渡に流された時は十七歳であつたが、父の阿佛房が高祖に敬ひ仕へたので、上人も又高祖の奴僕と成つて薪水の勞を執つた。弘安二年阿佛房が石田鄕一谷村で死んでしまつたので、上人その遺骸を荼毘に附し、骨を集めて身延山に登り、父の塚前で髯を剃つて出家をした。豐後房日滿といふ名は此の時高祖から與へられた名である。間も無く佐渡に歸り、家を寺として父日得上人を開山とし、自分は第二代となつた。蓮花王山妙宣寺之れである。高祖大曼荼羅を書いて贈られた。康永二年八月十五日、年八十九で歿した。

（十六）日悟上人（仙臺法運寺第二代）

上人字を堯意、號を了寂院と云ひ、俗姓は青木氏である。仙臺の人で、幼少の時から出家をして身延山日深上人に仕へ、後ち心性院日遠上人の弟子となつた。仙臺侯伊達政宗の子忠宗の歸依を受けて法運寺を開らき、日遠上人

を開山として、自から第二代となつた。貞享三年正月四日寂、年七十一であつた。

（十七）日德上人（武藏顯本寺第二代）

上人は俗姓を墨田と云ひ、名を五郎時光と言つた。上州の墨田次郎時忠の嫡孫で、中老秀上の甥である。高祖の門に入つて出家をした。嘗つて自分の領地たる武藏足立郡新曾村に高祖が難產を救つた舊跡があつたので、その地に寺を建てゝ日向上人を開山とし、自から第二代となつた。正中二年十二月十二日寂、壽不明。

（十八）日念上人（安房妙福寺第二代）

上人は松本房と呼び、もとは天台の僧であつたが、下總眞間山の日頂上人の門に入つて出家をし、後ち高祖に見えて別當の秘奧を拜した。初め高祖安房國南無谷の泉澤權頭の所に宿つた時、權頭及びその子三人歸依して宗を改

め、弘安二年に寺を造つたので、高祖は上人に命じて往て監督せしめた。上人卽ち成就山妙福寺と號し、高祖を崇むで開山とし、自から第二代となつて附近の敎化にも力め、下總河西の蓮昌寺、結城の妙國寺、越後の妙國寺等を造つた、建武元年八月二十七日逝去、年齡は詳かで無い。

(九) 日證上人（駿河常林寺第二代）

上人は寂仙房と號し、兵部阿闍梨と呼んだ。眞間山の日頂上人の弟子である。父、橘樹伊豫守定時の舊跡たる駿河富士郡重須村に於て、兄の日頂上人及び甥の妙國尼と共に父母の墓を弔らひ居る事年餘、延慶元年二月三日に妙國尼死し、同三年三月十四日に上人も又瞑目した。後人その地に寺を造つて當林寺と呼び、日頂上人を開山とし、上人を第二代とした。

(十) 日成上人（佐渡根本寺第三代）

上人は號を大仙房と云つた。京都妙滿寺の第十二代日護上人の許で出家をし、後ち佐渡に赴いて高祖の舊跡を巡拜し、天文二十一年塚原に一寺を開いて根本寺と言つた。高祖を開祖とし、日朗上人を第二代とし、自から第三代となつた。永祿二年二月一日入寂。

(十一) 日春上人（甲斐長光寺第三代）

上人は字を空存と云ひ、俗姓は鮎澤氏、甲斐山梨郡の人である。初め天台宗の僧となつて法師の位に昇つたが、立正寺の日乘上人に見えて法華の敎義に服し、終に高祖の弟子となつて日春と云つた。後ち長光寺を開いて高祖を開山とし、日乘上人を二代とし、自分は三代となつた。死去の年月日、年齡共に不明である。

(十二) 日乘上人（能登妙成寺第二代）

上人は初め大宮坊と云つて眞言の山伏であつた。永仁二年甲子上人佐渡から能登へ渡る船中で日像上人に逢ひ、種々宗論を戰はした後ち己れの義の惡

かつたことを知つて日蓮宗に歸依し、日乘と改めた。能登羽咋郡瀧谷で日像上人に別れ、後ち此の地に長榮山妙成寺を造つて日像上人を開祖とし、自から第二代となつた。日像上人の歿後三十九年を經て康曆二年六月二十七日百〇十歳の高齢を以て逝かつた。

(三) 日靜上人（佐渡妙照寺第二代）

上人字は學乘、一位阿闍梨と呼んだ。佐渡國雜田郡石田郷一谷村の人、邑吏近藤力次郎清久の族で初めは眞言宗であつた。文永九年領主の本間氏高祖が塚原で困しむでゐられるのを見て、法華寺を開き、近藤氏をして此所に遷らしめたので上人も亦衣を更ためて隨ひ、遂に高祖の教に服して宗旨を改めた。高祖此の地に居らるゝ事三年の後ち許されて歸り給ふや、上人その跡を護つて終に伽藍となし、高祖から妙華山妙照寺の名を與へられた。上人大いに喜んで高祖を開山とし、自から第二代となり、後ち亦松榮山實相寺を開いて高祖の跡を保存した。正安二年六月二十二日寂、年不明。

第七　諸刹住職傳

(一) 日量上人（甲斐妙了寺第十六代）

上人は字を泰壽と云ひ、後ち字を院號とした。俗姓は市川氏、甲斐巨摩郡荆澤村の人である。七歳の時出家し、十六歳にして飯高談林に學び、苦學難行を積むだ末、身延山日曉上人の弟子となつて、松崎談林の化主となつた。後ち甲斐の妙了寺主に出世し、間も無く塚原に隱れ退いて、西谷談林から頻りに招かれしも行かなかつたが、日享上人の書面に接して止むを得ず往つて化主となつた。正德元年九月二十日、年五十一で歿した。

(二) 日遙上人（肥前本妙寺第三代）

上人は字は學淵、本行院と號し、朝鮮國慶尙道河東の人余壽禧の子である。我が文祿二年、加藤清正が朝鮮から歸るとき、雙溪洞の普賢庵といふ所で一

小兒を見たので、その姓名を尋ねた所、默つて筆を執つて「獨上寒山石徑斜白雲生處有人家」と書いたので、清正不思議な思ひをして日本に携へ歸つた。之れ卽ち上人で、その時僅かに十歳であつたといふ。後ち清正、その時六條談林の主であつた寂照院の日乾上人に投じて出家せしめたが、師の上人、上人を飯高談林に送つて修學せしめた。居る事十餘年學德次第に高くなつたので、清正喜んで招き迎へ、本妙寺三代の主たらしめた。慶長十六年鄭重に清正の喪を修めて、萬治二年二月二十六日年七十九で歿した。

(三) 日祐上人（下總法華經寺第四代）

上人は號を淨光院と云ひ、俗姓は平氏、下總國相馬郡佐倉の城主たる千葉大隅守胤貞の子である。幼少の時、中山日高上人の門に入りて出家し、正和元年四月その遺命を受けて中山法華經寺の主となつた。かつて國內の香取郡に巡化した時、郡內は皆眞言宗であつたが、上人熱心に法を說く事百日の後ち、遂に安久山圓靜寺主を始め少からぬ信徒を得たといふ。後ち安房に行つて眞言宗の多聞寺主を說服して改宗せしめ、鎌倉六浦では眞言宗を改めて上行寺とし、武藏杉田村では午頭山妙法寺を造り、又遠く肥前に到つて松尾山護國光勝寺を開いた等その功却々多かつた。天皇之れを聞いてその寺を勅願寺とされた。後ち中山に歸つて閑靜な餘生を送つたが、應安二年五月十五日年八十で逝去した。

(四) 日祐上人（下總弘法寺第十六代日祐上人）

上人字を玄首、號を壽量院と言つたが、姓氏は詳かで無い。攝津浪華の人、幼にして出家して郡の雲雷寺に入り、後ち心性院日遠上人の弟子となつた。飯高談林に學ぶこと二十餘年に及んだが、當時の化主たる圓是院日耀上人の知遇を受けて慶安元年飯高に住み、寛文四年五月三日、年五十五で歿した。

(五) 日源上人（筑後福王寺中興）

上人は越前今立郡五鹿の人である。出家して諸國を歷遊し、文祿の頃筑後

下妻郡溝口村に行つたところ、矢部川岸の土地が肥沃で水が綺麗だつたのを愛し、その村の古寺福王寺に留つた。間も無くして忽然と去つたが、再たび數人の弟子を連れて來て始めて紙を製造し、その法を村民に傳へたので、村民大いに喜んだ。領主立花氏上人の功勞を賞して、福王寺に田地及び製造用の家具器具等を與へたので、益々手廣く製造して、溝口紙と稱して、諸國に賣出した。上人の死後此の地の紙の製造は益々盛んになり、慶長中筑後侯田中氏の領地となり、元和中久留米侯有馬氏の封土となつても、舊例に依り器具を與へてその業を奬勵した位である。元和中肥後侯加藤氏、寛文中黑田氏等何れも上人の弟子を招いてその法を傳へた位で、後世上人を九州製紙の開祖と云つてゐる。慶長十四年十月十四日福王寺に逝かつたが、年齡は明らかでない。

(六) 日陳上人（越前本成寺第二代）

上人は幼名を門一丸と云つて佐々木高綱の後裔である。曆應二年、越後國瀨波郡加治莊荒川鄕卽はち今の蒲原郡黑川村に生まれ、貞和二年八歲にして本成寺に登り、學頭日就上人の弟子となつた。後ち修學の爲め諸國を巡り、應安二年、上人三十一歲の時本成寺の讓りを受けて宗祖弘通の本旨を受け繼ぎ、本山の規則を定めた。應永四年、五十九歲にして京都に至り、本國寺で法華經を講じ、應永十三年四月本禪寺を創立した。同二十六年、年八十一歲の時本成寺を日存上人に、本禪寺を日登上人に讓つて同年五月二十一日本成寺で眠るが如く息を引取つた。

(七) 日邵上人（京都本禪寺第九代）

上人は字を壽政、號を智門院と云ひ、俗姓は詳かで無い。天文十四年京都に生まれ、出家して學德並び高く、天正年中光了山本禪寺の九代となつた。慶長七年十一月二十日、播摩姫路池田輝政の夫人督姫の逝去に方り、その地に下つて葬儀を行つた。翌慶長八年三月一日督姫の一百忌の時、輝政大衆の供養米を京都の本禪寺に送る爲め難波から船を出したが、その時攝津北山の

麓なる中筋村の村民領主が收納を催促するのに苦しむでその米穀を借りる爲め伊勢に赴むき、その途中輝政が船で送つた米穀を見て轉じて京都に入り、本禪寺に行つて上人に謁し、困窮の次第を告げて助けを乞うた。上人は宗旨の異なつた人々を救ふのは日蓮宗の宗風に背く由を言つて、法華經の功德を說き改宗を勸めた。そこで村民等相談して日蓮宗に改ためる起請文を上人に呈したので、上人直ちに米四十石を與へたところ、村民等の喜び斜めならず後ち中筋村に一寺を造つて松榮山妙幻寺と號し、上人を請うて開山とし、督姫の尊靈の冥福を祈つた。爾來毎月二十日に村民相會してその冥福を祈るのを慣とするやうになつた。上人死去の年月日その他は分らない。

（八）日目上人（駿河大石寺第二代）

上人は蓮藏房と號して、伊豆國波多郡の人である。かつて日興上人の推擧に依つて高祖にお目にかゝり、その滅後、日興上人が波木井氏と仲違ひして同門の諸上人皆交りを絶つた時、上人は獨りその舊恩を思うて日興上人の跡を慕ひ、大石寺第二代の主となつた。後ち上人奥州に遊化して登米郡新井田本源寺、森村上行寺、栗原郡宮野妙圓寺、柳妙敎寺等を開らき、又駿河の安久山村、同蒲原驛、甲斐國谷村に各々一寺を開いて何れも大法山東漸寺と號した。正慶元年日興上人の入寂に次いで、その翌年美濃國雲井の驛舍で逝去せられた。時に年七十四。

（九）日鳳上人（能登妙成寺第十三代）

上人號を鷲山院と云ひ、越中富山の人である。初め禪宗の僧であつたが、後ち能登妙成寺第十二代の主普賢院日慈上人の敎へを受けて日蓮宗に改ため松崎談林に入つて別に天台の學を修め、次いで妙成寺第十三代の主となつた。元和三年七月二十日に逝かれたが年齡は詳かで無い。上人初め京都の松崎談林に在つた時能登瀧谷の僧の死んだ事を感知したが、その後も屢々同樣の靈覺を以つて人を驚かしたので、當時の人々は上人を呼んで六根淨大德と言つてゐた。

上人は相摸及川の人、俗姓は森氏、父の名は七郎旨秀と言つて世々太田氏の家臣であつた。上人十五歳の時中山法華經寺で出家をし、後ち眞間山弘法寺に住した。應安中中山の日祐上人京都に登つて立正安國論を上つるに當り、上人も亦隨ひ往き、身延山日禪上人と共に宗門の興隆に力を盡したので、三人相並むで關東三傑の名を得た位であつた。寂年月日年齢等は不明である。

(二) 日長上人（和泉顯本寺内高三坊第二代）

上人は字を隆達、號を己成院と言つた、後に亦自庵とも月樂軒とも言つた。俗姓は高氏、その先は筑前博多の人である。貞治の頃、高三郎兵衞道玄、博多から和泉堺に移住して藥種交易の業を營み、十餘代その業を傳へたが、天正の頃に成つて良左衞門隆喜といふ者長子某に家を讓つて、菩提所なる顯本寺内に一庵を作つて退隱し、自分の姓によつて高三坊と言つた。上人は隆喜

の末子で父に從つて高三坊に移り、出家して專ら三寶に仕へた。隆喜死してからその庵を本寺の支院とし、上人はその第二代となつた、豐臣秀吉大阪城にあつた時、命を下して一藝に長じた者どもを召した所、上人は書畫に通じてゐたので、千の利休、曾呂利新左衞門の三人と共に召された。その時秀吉上人を賞して朱印六石を與へられたが、上人は自分では受けないでそれを顯本寺に納めた。上人は亦平生好むで小唄を好くしたので小唄隆喜と言はれて有名である。寛永二年十二月二日に此の世を去つたが、年齢は詳かで無い。

（備考）「堺鑑」「聲曲類纂」「類聚名物考」「嬉遊笑覽」等に上人の事を記して、日蓮宗の僧で顯本寺々内に住してゐたが、故あつて俗人となり、高三氏の家に往つて藥種を商ひ、後ち小唄の一節を編み出したとあるが、それは恐らくは事實を誤まり傳へたものであらう。

(三) 日陽上人（尾張法華寺第五代）

上人は本覺院と號し、尾張國清洲法華寺第五代の主である。延法中織田常勝が建たので、それより常に織田氏外護の任に當つてゐたが、就中信長は歸

依の心頗る篤く、手づから軍旗を出して上人に宗門の首題を大書せしめた。後ち信長美濃の岐阜城に移つて上人を招き、停住の地を割き與へた、岐阜の法華寺之れである。然るに天正中信長日蓮宗を怨むことあつて安土城で宗論を起し、威勢を以つて宗徒を辱かしめ、更に進むで身延山並びに本國寺を毀たうとした。上人之れを聞いて急ぎ馳け付けて信長に謁し、切に諫めて漸やく思ひ止まらしめた。後ちその功によつて權大僧都に補せられ、京都の日禪僧正、身延山の日新上人等によつて厚く謝された。慶長三年四月六日逝去。壽は詳かで無い。

日蓮宗高僧傳附錄

第一　日蓮宗寺院緣起

全國に亘て、悉く本宗大小寺院を網羅せんは、誠に容易の事にあらず。されば本書には主として大本山及び宗祖聖人に最も緣由深き寺院、もしくは著名にして參詣者の多き寺院につき、其の緣起の要略を記述せり。尙ほこゝに掲ぐへくして、調査の便なきか爲め掲げ得ざりしものもあれど、此等は版を重ぬるに從つて追補する事とすべし。次ぎに參考の爲め本宗にて本山と稱へらるゝ寺名を擧ぐれば左の如し。

總本山　甲斐國巨摩郡
身延山久遠寺
大本山　武藏國荏原郡
長榮山本門寺
大光山本國寺　山城國葛野郡

正中山法華經寺　下總國東葛飾郡
大石寺　駿河國富士郡
妙滿寺　山城國葛野郡

本山

妙法華寺（伊豆）　弘法寺（下總）　妙覺寺（山城）
頂妙寺（山城）　妙本寺（武藏）　海長寺（駿河）
報恩寺（紀伊）　國前寺（安藝）　本遠寺（甲斐）
妙興寺（下總）　妙法寺（越後）　妙照寺（佐渡）
孝勝寺（陸前）　本土寺（下總）　蓮永寺（駿河）
立本寺（山城）　本滿寺（山城）　妙法寺（甲斐）
妙覺寺（上總）　龍口寺（相摸）　本立寺（伊豆）
正法寺（上總）　日本寺（下總）　妙宣寺（佐渡）
妙成寺（能登）　久昌寺（常陸）　藻原寺（上總）
誕生寺（安房）　本法寺（山城）　妙傳寺（山城）
實相寺（駿河）　妙純寺（駿河）　光勝寺（肥前）
佛現寺（伊豆）　本覺寺（駿河）　鏡忍寺（安房）
根本寺（佐渡）　妙國寺（和泉）　妙顯寺（下野）

總本山身延山久遠寺（甲斐國巨摩郡身延村にあり）

賢も、高祖樣神の法寶、吾朝の靈鷲山と聞えたる身延山は、其昔波木井の鄕に屬し、南部六郎實長の所領たりしを、實長高祖に歸依の志厚く、高祖晩年隱遁閑居の砌、此山に草庵を構へて之れを迎へたるは、實に文永十一年六月、高祖歲五十三の時なり。四方來集の信徒漸く多きに及び、實長更に庵側に十間四面の講堂を造る、是な久遠寺の濫觴となす。其後百九十年を經て、十一代の貫主日朝上人、別に曠濶の地を相して新に講堂を營む。高塔雲を凌ぎ、堂閣軒をつらね諸坊八谷に點在し、其數二百餘宇、是に於て高祖の威靈彌煥發し、法運隆盛鬱然として海內の勝地となる。後後光嚴帝は、高祖に大菩薩號を賜ひ、代々の貫主綸旨を賜ふて參內を許され、朝廷の御祈願所として御歸依淺からず。從て諸侯伯の歸向亦多く、德川家十萬石の朱印を寄せ、一山殿宮せり。然るに文政七年の秋、火災起り、諸堂悉く焦土に歸す。その後再建に着手せしが、明治八年再び回祿に罹る。後ち幸にして日薩日鑑の碩德相繼て法燈を揭ぐるあり、輪奐亦備はるに至る、今の本院諸堂是なり。

長榮山本門寺（池上村にあり）（武藏國荏原郡）

高祖入寂の靈場にして、四大本山の隨一なり。文正十一年十一月、鎌倉將軍惟康親王の臣池上右衞門太夫宗仲の創立する所、山號寺號は高祖自ら名づくと云ふ。弘安五年秋、高祖身延山を下り、宗仲の邸に入り玉ふや、痼疾漸く重り再び起つ能はざるを覺悟したまひ、往昔釋尊は靈山長なる跋提河の邊り工匠純陀が家に滅を取りたまふ、今日蓮も身

延の長なる玉川の邊、工匠宗仲の邸に死せんとて、後事を弟子檀那に托し、同年十一月十三日遂に入涅槃したまふ。本山境内六萬九千三百八十四坪は、實に法華經の文字六萬九千三百八十四字に符合す、則ち天意とこそは信ぜられたり。祖師堂の開剏は宗仲なれども當山第二祖日朗上人自ら諸弟を率て經營し文保元年に至て土木の功を終り輪奐悉く成る。其後加藤清正公、太閤の命に由り自ら奉行監督して四十間四面の大堂を建立せしも功未だ全く竣らず、中途逝去せられしかば公の息女德川瑤琳院公の意を繼いて之れを完成せり。後寶永年間火災に罹りしが享保八年當山二十四世日等上人德川吉宗公の喜捨により更に復興す、之れ今の祖師堂なり。堂前の坂は此經難持坂と唱へ、此經文字數九十六字に緣み九十六段に築かれ、其材石は清正公が朝鮮より持返られたる子持石なり。

祖師堂と並て釋迦堂あり。創立の堂は燒失し、德川吉宗公の發願にて享保十五年の造營なり。淸正堂は文政四年の建造にて堂の右に公の墳墓あり。樓門は祖師堂の前に在り、二王の像を安置す、行基菩薩の作、元と古川藥師堂に在りしものなり。門は慶長十三年の建立にして、正面の額は大虛光悅の筆蹟東三額の一なり。長榮堂、鬼子母神堂読樓大黑堂等は祖師堂の周圍に在り、本院の西に高祖の茶毘所あり、多寶堂と稱す。高祖御廟は本院の西に在り、寶塔の首題御判皆御眞蹟を刻む。釋迦堂の前に巍然として立てるは淸正公の銅像にして、明治四十三年の建立にかゝり、帝室技藝委員竹内久一氏の作。主唱者は小林虎之助、村上米治、金澤鐵太郎、願人は三須安五郎、小倉某等の諸氏、玉垣は武士道誠吹を以て有名なる雲右衞門入道の獨力寄進なり。

日朗上人及び池上宗仲夫妻の墳墓、狩野探幽、星亨の墓あり。毎年四月二十一日より二十八日迄を千部讀誦會とし、十月十二三日を會式とす。此日は賽者極めて多く爲めに臨時汽車を發す。

大坊本行寺（武藏國荏原郡池上村にあり）

長榮山と稱す、本門寺の西麓に在り。池上右衞門宗仲の館跡にして、高祖入滅の靈場なり。昔康元の頃宗仲、鎌倉に於て高祖と師檀の契を結び、文永元年其所領に本門寺を創す、後弘安五年九月十八日高祖身延より當所に着し、越て十月十三日拔に滅を取りたまふ。安置し奉る尊像は、宗仲の請によりて、高祖自ら刀を執り、鏡に向つて刻したまふ處にして、自鏡願滿の祖師と稱す。入滅後弟子檀那此尊像の前に集會し、御一周忌の會式、御妙判の結集を行ふ。御臨終に倚らせたまひたる床柱今に存す、境内に硯井あり、高祖此水に墨り、曼荼羅を圖したまふ。會式櫻は入滅に際し時ならぬ花咲き亂れ、後代に會式供花の因緣を遺す。當院は池上三院家の首位なり。

朗慶山照榮院（武藏國荏原郡池上村にあり）

日朗上人棲神の遺趾にして、正應四年の草創なり。高祖入滅後上人茲に庵を構へ、日々高祖の廟に參すること三十七年、元應二年入寂の後空位六十年にして日鏡上人の復興なり。後本門寺二十二世日玄上人鎌倉比企ヶ谷寶饒檀林を此地に移し、南谷檀林と號し當院之を管掌せり。

境内妙見大菩薩を祀る、紀州大守頼宣卿の願により建立す、朗師坂朗師松の舊跡あり。

池上理境院（武藏國荏原郡池上村にあり）

本門寺總門下に在り、元久成院妙祐山崇安寺と稱す。本門寺三十世日輪上人の坊跡なり。延寶年中、檀越長澤氏

の母理境院日貞資を投じて再興す、依て其名を改む。本院の什寶たりし大黒天は高祖の自作にして、寛保年間別に一堂を建て之れを祀る、今の池上大黒堂是なり。

日圓山妙法寺（武藏國豐多摩郡和田堀の内にあり）

元眞言宗にして、元和の初め現宗に改ると云ふ。寺號の起りは當所の住人妙仙院日圓尼なるもの、碑文谷法華寺の僧に歸依し其子學仙院日遜上人、亦母の志を承け、一宇を建て法華寺の末寺となし、母を開祖と崇め、其名を寺號としたるなり。時に傍地に光立寺といへる寺ありしが、故ありて廢寺となりしを、其所屬の檀越及田園を當寺に合併す。後當時五世日性上人の時、碑文谷法華寺不受不施事件の爲め廢滅となりしかば、該寺の聖像を移し奉る、厄除の祖師是れなり。聖像は日朗上人の作なり。往昔龜山天皇の御宇、高祖聖人北條氏の爲めに伊豆伊東に流さるゝや、日朗上人は鎌倉に留められ、常に由井ケ濱に行きて師の敎旨を祈りしが、一日巨木の漂ひ來れるを見、之を取りて師の像を刻し、朝夕供奉怠らざりしが如し。後高祖鎌倉に歸るや、此像を見て感稱し、我神を此像に入れ、盡未來までも祈願の者をして諸厄を除かしめんと、自ら開眼したまふ、之れ厄除の名ある所以なり。

境内日朝堂、二十三夜堂あり。寺寶頗る多し。

中山法華經寺（下總國東葛飾郡中山村に在り）

正中山法華寺は宗門四大本山の一にして、池上本門寺と對する關東宗門の重鎭たり。其創立は遠く文永十一年の古にありて

高祖の大檀那富木氏の處つる所なり。

建長五年高祖下總船橋の津より鎌倉に趣かんとし、富木摩播守常忍と舟を同ふす。常忍高祖の敎化を受け、師檀の約をなす。月餘にして常忍領地下總に歸るの途、高祖を伴ひ、若宮の地に法筵を張る。土民歸信するもの多く、遂に常忍が館の傍に一堂を作り、法華堂と稱し高祖を請ず。太田乘明、曾谷敎信の敎を承くるもの相踵く。高祖鎌倉弘通の暇を以て、屢此地に遊化し、說法一百座に及ぶ。文永の年小松原の法難に疵を蒙りたまふや、遁れて此堂に來り加養し、血染の袈裟今に存す。高祖後に妙蓮山法華寺の稱號を與へたまふ。常忍晩年に出家し、此寺を繼ぐ、太田乘明の一子高祖の弟子となり、日高といふ。常忍の撫育をうけ太田の館を改めて寺となし、正中山本妙寺とす、今の中山の地是なり。常忍規定して兩山一寺の制を作り、法華寺を本とす。高祖一尊四菩薩の像を刻みて常忍に授く。後法華寺を引て本妙寺に合し、本妙法華寺と云ふ、正中山の濫觴なり。奥の院は法華寺の趾にして、日琉上人此處に一町四方の地を構へ、經塚を築き、高祖の像を安置す、當山創立以來災害に罹りしことなく、山容堂閣數百年を經て殿然たり。眞に稀有の靈場と云ふべし。

什寶としては觀心本尊抄立正安國論の眞筆は始め數ふべき者頗る多し。

祖師堂の右に駒形堂あり。其傍に老幹天に參し、綠葉地を蓋ふの銀杏樹は一篇の哀史を語る、伊豫阿闍梨日項上人の逸話、六百年の下人をして涕淚禁ずる能はざらしむるものあり。

法會は二月十日の出行會、四月十三日より千部會八月七日の虫拂、十一月十三日より會式、

遠壽院は法華經寺の山門内にあり。中山祈願法の根本道場として世に知られたる名刹なり。

原木妙行寺（下總國葛飾郡行德町原木）

現今祈禱法大に行はれ殆と中山を凌ぐ、其功驗著しと云ふ、抑も當山安置、火中出現防火日蓮大士は中山生御影高祖の尊像を寫し奉りしもの中老日法上人の作、板御影也。其來由を尋ぬるに、古昔中山の司役安世院に在りて四百餘年の間秘藏せしに、寶曆十二年十二月十九日の夜火災あり、近隣鄉村の庶民先きを爭うて走せ集り、其中に當村の住平田武右衞門なるもの無二の信者なるが、熾んなる火中聲あり、武右衞門と呼ぶこと二三遍、自ら不審の思をなしやむる處、頓かに强雨降り、火焰忽ち消ゆ。須臾にして光明赫々として四顧晝の如し。就て之れを見るに、一片の黑板あり、妙なる哉、宗祖大士の尊影少しも損ぜず、燒けず、文字なほ全し。思ふに先きに我名を呼び扶けるは、極めて此靈物なるべしと、即ち院主に謁して之を懇求し、奉侍して家に歸り、深く渴仰し奉る。其後中山八十五代日處上人、此緣由を聞き、尊き御影なれば宜しく精舍に移すべしと命あり、之れに依つて當寺に安置す。

長谷山本土寺（下總國東葛飾郡小金町字平賀）

宗門三本三長の一にして、又六門家の員にあり。高祖を開基とし、二祖は日朗上人、三祖は日傳上人なり。文永七年當國目代陰山土佐守の草創にかゝる延慶二年曾谷次郎左衞門教信の經營により、堂宇悉く備はる、塔中輪像院は日像上人及池上三祖、日輪上人誕生の遺趾なり。境內に日朗上人の母君妙朗尼の墳墓あり。當山は四十四ヶ本山の一にして、末寺七十あり。

常在山藻原寺（上總國長生郡茂原町にあり）

宗門本山の一なり。建長五年高祖小湊にて始て一宗を開創したまふや、大聲俚耳に入らず、危害御身に迫れるを以て、暫く、遁れて鎌倉に趣かんとするの途、當國埴生郡笠森の里に宿す。「うきにふる淚の雨にぬれじとて今日笠森をみにきぬるかな」の咏は、人の知る所なり。茂原の鄉士齋藤兼光高祖の德化に浴し、家を捨て寺となし、常在山妙光寺といふ、後に藻原寺と呼ぶ。高祖滅後、日向上人遺命によりて當寺を董す。

靈堂は高祖の眞蹟本尊書翰を始として六上足の遺墨數多く、高祖の乘駕は殊に稀代の珍たり。

眞間弘法寺（下總國東葛飾郡市川にあり）

弘法寺は往古天台宗に屬し、關東檀林の巨刹なりき。下總若宮の邑主富木胤繼、高祖の檀那となるに及び、寺主了性法印と法義を論じて之を屈す、了性窮に寺を遁る、富木氏則ち六老僧伊豫坊日頂上人をして其跡を襲かしむ。高祖富木氏造立の釋迦佛を點眼し、當寺の本尊となさしむ。

當山鎭座の天兒奉靈神は萬葉集の歌によりて名高し。

小湊山誕生寺（安房國安房郡湊村にあり）

本寺は高祖降誕の靈跡なり。文永元年正月高祖自ら草庵を結び、悲母蘇生の道場とす。後建治二年、日家上人

に命じて一精舍を造らしむ、興津の領主、佐久間重貞之を助け、本寺を建立す。當初は蓮華淵にありしが、再三瀑曝にかゝり、遂に今の地に移る。國主里見氏、德川氏、水戸公等歷代の歸依あり七堂伽藍悉く具はる。明治以後豐永日良師頼殿の後を承け、經營慘憺今日の盛觀を見るに至り、本佛堂祖師堂客殿書院等の建物、丹粱壁瓦人目を驚かす。鬣生水は寺門の側らに在り、蓮華淵妙の浦の舊蹟は近傍に存す。小松原御難に疵を養ひたまひし嶋、疵洗井、亦茲を距る遠からず。

妙榮山大蓮寺（武藏國橘樹郡保土ヶ谷町）

大蓮寺は高祖一泊の靈跡帷子の里にあり、仁治三年高祖二十一歳の時房州清澄山を出で、鎌倉へ御遊學の途次、程ヶ谷の邊りに至りたまふに、偶々日沒に際し、一民舍を叩いて宿りを求む。家の童兒釋迦佛の本像を玩弄として遊び戯るゝを見たまひ、佛經の邪正權實の別を論したまふに主人前非を悟り、頓に質直の信を發し、自ら法華堂を邸内に造り、法華讀誦に其生涯を終れり。其後正住院日觀上人堂宇を改築し、初めて妙榮山大蓮寺と號す。勸請の祖像は中老日法上人の作なり、高祖眞蹟の法華經を腹内に藏む。

長誓山妙顯寺（武藏國北足立郡戸田村にあり）

本寺は往昔慶康將軍の家臣、武州新倉の領主隅田五郎時光、會々其妻産に難みて靈佛に祈り、其夢告によりて、此地を過ぎれる宗祖を迎へ其妙布によりて安らかに、男子を生むを得たり。其名を德丸となづく。弘安二年德丸甫めて九才、時光兒を携へて身延山に詣で本門の大戒を拜して日堅と稱す、時光も亦出家し邸宅を捨てゝ道場となさん事を乞ふ。宗祖名を日德と賜ひ、大曼荼羅を授與し、長誓山妙顯寺と命じたまふ。又前に靈夢を感ぜし釋迦佛は宗祖之に點眼し、子安の釋迦佛と仰せらる。即ち大曼陀羅及び釋迦佛は當山の二大寺寶にして、安産妙符と共に世人は永く其慈光に浴しつゝあり。

長興山妙本寺（相模國鎌倉町比企ヶ谷）

本寺は高祖初轉法輪の道場なり。建長五年高祖房州より鎌倉に入り、名越の窟に在りし砌、當時北條氏の儒官たりし比企大學三郎能本を度す。能本は實に高祖最初の檀越にして、妙本寺は弘通の根本靈場たり。後日蹈上人に附し、池上本門寺は能弘の導師入滅の地長興山は所弘の妙法流布の處なれば兩山一體なるべしとて兩山を並せて附屬あり。爾來兩山は一貫主兼職の定めなりしに中興日調上人を經て日愛上人に至り德川家康上人を尊信すること厚く寺門の繁榮前後無比なり、爾來歷代の貫主は多く池上に住し當時には司務職を置く。

山内に源頼子（頼經の室）讃岐局、比企能員等の墓あり。又小御所、竹の御所、蛇形池等の舊跡あり。高祖御舍利、蛇形本尊等靈寶甚だ多く平重衡千壽前を別宴に用ひたる黑漆の盃あり。

妙法華經山安國論窟寺（相模國鎌倉町松葉ヶ谷）

本寺は日朗上人の開基なり。建長五年、高祖小湊を出て鎌倉に弘通あらんとて當地に來りしも謗法の人のみ多く一宿さへも假し參らすものなし、高祖名越の丘の傍に自然の岩窟あるを見出し茲を假の宿りとして暫し雨露を凌がせたまふ、有名の立正

安國論の著作は此處に於てなしたまふといふ、日朗上人後に一堂を建て弘通發展の靈跡を止む。
當時より施與する虫齒の呪符は、高祖の侍童熊王丸の高祖より授かりし祕法を傳ふ、利益顯著なりといふ。

玉澤妙法華寺（伊豆國田方郡錦田にあり）

本寺はもと鎌倉濱土の地にあり、六上足の日昭上人の開基なり。十二世日弘上人の時一山みな兵火に罹り、山を擧けて越後村田妙法寺に移る。後數十世を經て日莅上人に至り、始めて豆州賀殿妙國寺に歸る。時に文祿二年なり。妙國寺は妙法華寺の末寺なり、居ること二十一年にして、元和七年日亮上人の時、賀殿の堂舍大半を玉澤の地に移し紀州養珠院の發願により茲に妙法華寺を再建せり。

柴又帝釋天（武藏國南葛飾郡金町村大字柴又經榮山）

題經寺の本尊なり、寺は寛永六年の創立にして經榮山と號し、中山法華經寺の末也。本尊帝釋天王は高祖自作と稱し、庚申の日を緣日とし參者頗る多し。

《東京市內》日本橋區內寺院

村雲鬼子母神堂　小傳馬町に在り、舊獄舍趾也。明治十八年六月の創立にして、京都瑞龍寺の別院たり。本尊鬼子母神像は、關白秀次の母日秀尼の瑞龍寺に安置したるものなりと傳ふ。村雲日榮尼公の發願により之を本堂に移し本名を稱せり。

祖師堂　小傳馬上町に在り、舊獄趾也。明治十六年の創立にして、本尊日蓮大菩薩の像は身延山久遠寺より遷したるものなり、備前長船作大刀一振外古刀四振を寺寶とす。

清正公大神祇　濱町に在り、御正當六月二十四日、會式十月二十四日。

清正堂
帝釋天堂　具足町に在り、天保二年の創立なり。毎月三の日を緣日とす。
本八丁堀一丁目にあり、下谷區谷中一條寺の持にして、安永九年楓川浚泄の時河中より出てたる石像を安置す。

京橋區內寺院

芝區內寺院

松流山正傳寺　芝金杉濱町に在り。中山法華經寺末にして、慶長七年の創立、開山を日億上人とす。
寺內毘沙門堂あり、傳教作毘沙門木像を置く、寅の日を緣日とし、參詣者頗る多し。
蓮華寺　三田三丁目にあり、下總中山法華經寺末也。炎秀山と號す、慶長十九年、僧淨蓮芝金杉濱邊に學堂を營み、子育鬼子母神を安置し、慶安元年赤羽の地に一寺を建て後此地に移る。

常祐山圓德寺　三田小山町西南に在り、中山法華經寺末也。寛永元年芝金杉裏四丁目に創建、後此地に移る、開山を日蓮上人と云ひ、中興を日念上人とす。水鏡日蓮大菩薩を安置せり。

法運山長久寺　三田小山町に在り。身延山の末にして、寛永五年の創建に係り、日浩上人を開山となす。子安高祖大菩薩安置。

長應寺　伊皿子町にあり、越後本成寺末也。若荷山長久院と號す、文明五年の創立、中興開山を日翁上人とす。塚内明人の墓あり。

妙莊山藥王寺　三田塞裏町に在り、安房誕生寺の末也。元和七年麻布狸穴に創建、寛文元年今の地に移る、開山は日傳上人となす、感應日蓮大菩薩安置。

朗性寺　二本榎町二丁目に在り、池上本門寺の末に係り、其觸頭也。天正二年今の八丁堀邊に創建し、明暦三年此に移る、開山は日性上人、七面大天女を安置せり。

誠瀧山妙圓寺　白金臺町一丁目にあり、身延山末に籍し、創建の年月詳かならず、瀧本乘女なるもの開基す。寺内に足利將軍の持念佛を安置せり。

富士山上行寺　二本榎本町にあり。駿河富士郡西山本門寺の末にして、慶長元年相摸小田原より櫻田に移り、後此地に移る、日養上人を開基とす。寺内榎本東順、同其角、桂川甫筑、同甫周等の墓あり。

正法山圓眞寺　二本榎木町にあり、誕生寺の末にして、初め西の久保に創建し、後此地に移る。開山は日延上人、創立年月不詳、鬼子母神あり。

智光山立行寺　白金三光町にあり、京都本禪寺の末なり。日通上人を開山とす。寛永七年の創立、寺内に傷蓋松、齊藤實盛の首塚及び大久保彦左衛門の墓あり。

最正山覺林寺　白金今里町にあり、誕生寺の末なり。寛永年間の創建、日延上人を開山とす。寺内に清正堂あり、加藤清正を祭る。寺傳に云ふ、文祿年間清正凱旋の時朝鮮人を伴ひ歸り、初め誕生寺の貫主とす、日延上人是也。後寛永四年江戸に來り、八年當寺を開くと云ふ。例年五月四、五、六日に勝守を授く、詣する者夥し。毎月十四、二十四日を緣日とす、貴重なる寺寶頗る多し。

榮松山長運寺　三田四丁目にあり、鬼子母神を安置す。

常德山玄照寺　白金下に在り、開運大古久天安置。

吉祥院　同

金峰山本妙寺　同

妙建山本立寺　本寺内太神宮は、德川殿有院の守本尊にして、近江局台命を受け、當時に勸請す。

長祐山承教寺　二本榎に在り、妙見宮、長祐稲荷安置。

日蓮宗々務院　二本榎承教寺中に在り。

德聚山圓珠寺　金杉に在り。最上位經王大菩薩、七面大天女安置。

麻布區內寺院

廣榮山一乘寺　飯倉三丁目にあり、誕生寺の末にして、創立年月詳かならず、開山日逢上人は萬治四年に寂す。

妙光山眞淨寺　飯倉三丁目にあり、下總平賀本土寺の末にして、創立年月不明なり。開山を日養上人と云ひ、明暦元年五月寂す。寺寶頗る多し。

日通山妙善寺　麻布櫻田町西日の見横町にあり、誕生寺末なり。寛永中の創立、開山を日爲上人と云ふ。星降りの梅と稱するものありしが今は無し、寺內に子安鬼子母神堂あり、參詣者多し。

日榮山妙祝寺　麻布櫻田町にあり、誕生寺末なり。寛永四年の創立に係り、開山日爲上人は一柳監物夫人と親子の約あり、養母菩提の爲め本寺を創立し、由て其法號妙祝院日榮大姉を取りて寺號及山號とす。寺內に閻魔不動、七面鬼子母神を安置す。

榮久山大法寺　麻布一本松町に在り、誕生寺の末にして、慶長二年創建、日利上人を開山となす。大黑殿あり、隔月甲子の日賽者多し。

杉頭山本善寺　麻布一本松町に在り、下總本土寺の末なり。寛永二年の創建、蕭山は日東上人なり。本尊は七面天女にして、俚俗麻布子番の七面天と稱するもの是也。緣日は一、九、十九、二十九の四日。

明見山本光寺　麻布宮村町に在り、越後本成寺末にして、寛永元年日要上人の開基。

法輪山妙傳寺　谷町に在り、毘沙門天王安置。

微妙山眞性寺　同町に在り、多門天王安置。

日登山清鎭寺　六本木に在り。

高林山法典寺　同町に在り、客人大明神安置。

常在山長耀寺　同町に在り、日則上人作高祖大菩薩安置。

妙山乘泉寺　櫻田町に在り、鬼子母神安置。

本樹山長幸寺　同町に在り。

法久山安全寺　藪下に在り、高祖大菩薩安置。

赤坂區內寺院

佛智山圓通寺　赤坂一ツ木町にあり、伊豆妙法華寺末にして、寛永二年今の溜町に創建、開山は日亮上人、元祿八年此に移る。寺に日蓮聖人自筆遠藤正親に與へたる曼陀羅其他あり。又十二支の巨鐘あり、銘は深草元政作る所にして毎旬十二支の字を冠す。

持法寺　青山北町四丁目にあり、越後本成寺の末なり。創建年月詳かならず、開山は日粘上人なり。

蓮光山妙圓寺　青山に在り、日法上人作開運毘沙門天安置。

四谷區内寺院

妙典山戒行寺　南寺町十四番地にあり、身延山の末也。文祿四年、日養上人麴町八丁目に創建、寛永十一年此地に移す。鬼子母神あり、定朝の作と傳ふ。境内に名儒佐美宿水の墓あり。當寺歴代中日貞上人は山本勘助の孫なりといふ。

妙性山正覺寺　南寺町にあり、身延山の末寺なり。元和四年の創建、開基は上野隼人、開山は日耀上人なり。

正妙山法恩寺　南寺町にあり、京都妙滿寺の末なり。寛永元年の創建に係り、開基は日禎、開山は日什上人なり。

客殿に五道天、三十番神、高祖聖人像等を安置す。

平等山本住寺　南寺町にあり、本土寺の末也。日詠上人を開山とす、寺内に歌人荻原宗固の墓あり。

法善寺　鮫河橋町一丁目にあり、誕生寺の末也。寛永八年創建。開山を日親と曰ふ、寺内に子安鬼子母神あり。

稲荷山妙行寺　鮫河橋町にあり、身延山の末也。初め本乘院と稱する草庵なりしが、慶長十九年麴町に於て一寺となり、寛永十一年此地に移る。開山は日純上人。

高見山日宗寺　鮫河橋二丁目にあり、誕生寺の末なり。元和五年の創建、開基藤堂和泉守夫人の法號を以て寺號山號とす。開山は日龍上人、本尊は夜明け鬼子母神と曰ひ、高祖聖人の母死去せる時、此像に祈りて夜明けの頃蘇生せしめたりと傳ふ。境内に栗本瑞見の墓あり。

顯妙山本迹寺　元鮫河橋南町にあり、誕生寺の末也。寛永二年の創建、日清上人を開山とす、子安鬼子母神、火防七面佛等あり。

長德山妙行寺　鮫河橋南町にあり、越後本成寺の末也、寛永元年の創建、開山を日善上人とし中興を日量

上人といふ、後丘に田宮お岩の墓あり。

寶勝山圓通寺　四谷須賀町十六番地にあり、誕生寺の末なり。寛永十七年日深上人此に草庵を結びて寶勝院と唱へしが、後高祖の作大黑天の像を誕生寺より遷し、稱して大黑山と曰ふ。毎月子の日を緣日とし、甲子の日を祭日とす、賽者多し。

法眞山理性寺　四谷永住町に在り、越後本成寺末也。萬治三年の創立、日充上人の開基なり。

長廣山立法寺　四谷霞丘町にあり、誕生寺の末、日丁上人の開山なり。

長周山榮林寺　子安鬼子母神安置。

如說山修行寺　くらやみ坂下に在り、七面天女安置。

牛込區内寺院

鎭護山善國寺　神樂坂肴町にあり、池上本門寺の末也。文祿四年の創立、開基は日慥上人なり。日蓮宗祿所にして、本尊毘沙門天は加藤清正の守佛なりと傳ふ。古來參詣者多く、東都歲事記に芝金杉正傳寺の毘舍門と當寺の毘沙門とを最も賽者多しと記す。午及び寅の日を緣日とし、諸商市を爲し、雜閙を極む。境内又出世稲荷社あり、一刀流の劍客吉田一帆齋の墓あり。

妙德山圓福寺　牛込横寺町にあり、中山法華寺の末也。寛永年間の創建、開山は日圓上人、開運生御影日逊大菩薩の像あり、畫家椿椿山の墓あり。

本妙山感通寺　牛込喜久井町にあり、誕生寺の末也。初め市谷にあり、此地に移る。日建上人を開山とす。出迎毘舎門天安置。又摩利支天堂あり。

一樹山宗柏寺　牛込榎町にあり、京都頂妙寺の末、日意上人の開山、寛永六年の創建也。立像釋迦佛は桓武天皇の詔を奉し叡山にて彫刻したるものなり。

松榮山大法寺　榎町に在り。

常榮山淨輪寺　辨天町に在り、出世多門天皇安置。

法光山久成院　同町に在り、船守日蓮大菩薩安置。

正榮山佛性寺　同町、三十番神安置。

本光山清隆寺　赤城門前に在り、清正大神祇安置。

神照山長明寺　矢來町に在り、太神宮安置。

大乘山經王寺　原町に在り、開運大黒天安置。大覺大僧正作。

蓮詔山惠光寺　原町に在り、南無日蓮大菩薩安置。

正定山幸國寺　原町に在り、布引高祖大菩薩、清正公妙見宮安置。産婦腹帶を出す。

長久山常立寺　二十騎町に在り、開運大古久天あり。

妙經山常泉寺　同町に在り、日限日蓮大菩薩安置。

長久山本松寺　喜久井町に在り、願滿日蓮大菩薩安置。土用丑の日ほふろく炙を施す。

久榮山妙泉寺　同町に在り、歲德神安置。

春晴山法善寺　大久保町に在り、七面大天女安置。

東惠光山眞清淨寺　牛込東五軒町に在り。

眞清淨寺は本妙法華宗に屬し、明治三十二年の創立なり。正應院日感師、東都に同宗寺院の少きを慨き、有志と謀りて京都より同寺を移し、同宗の宗務所に充つ。

小石川區內寺院

本松山蓮華寺　小石川指ヶ谷町に在り、駿河有度郡蓮永寺の末也。開山日雄上人、開基高橋圖書となす。天正十五年の創立、舊支院善行院延壽院仙應院あり。又幕末の名士岩瀨忠藏の墓あり。

十行山大乘寺　小石川白山前町に在り、常州水戸久昌寺の末也。天正五年相州竹鼻村に創建し、谷中に移り、寶永元年此地に移る。開山は日合上人にして、今の本堂は元と水戸家の書院(藩邸)たりしが、安政の地震に本堂破壞したるより寄進したるなり。安置の鬼子母神像は、將軍家齊一橋家に在りたる時自髮を植て彫刻せしめたるものなりと傳ふ。寺寶甚だ豐富。境內には水戸家、仙石家、安藤家、內藤家の墓あり。

大覺山淨心寺　本所法恩寺末也。天文十九年の創建、小石川白山前町にあり。日增上人開山、淨心院日海尼を開山となす。尼は太田源六郎資高の妻新六郎康資の母也。

本誓山常驗寺　小石川白山前町にあり、京都本正寺末也。日淨上人の開基、寛永十七年の創立にかゝる。宗祖

の作と傳ふる大黒天安置。俳家服部嵐雪の墓あり。

朗昌山蓮久寺　小石川原町に在り、池上本門寺末也。天正十九年日愃上人を開基とす。

本念寺　小石川原町に在り、南品川本光寺末也。寛永十一年の起立、日量上人の開基也。山本北山及太田南畝の墓あり。

通源院　小石川大塚仲町に在り、本町本傳寺末にして、日行上人の開基、寛永中の創立なり。波切不動ありて著名也

大法山本傳寺　小石川大塚仲町にあり、樣山某、秋山某の開基、日行上人の開山なり。初め善性寺と云ひ、寛永中今の名に改む。駿州蓮永寺の末派に屬す。元と禪宗なりしが元和中瑞應禪師宗風を返し、名を日行と改む。土中出現高祖大菩薩安置。

妙法山蓮光寺　音羽七丁目に在り、鬼子母神安置。

善心寺　小石川大塚上町に在り、京都本禪寺末也。寛永十一年の創立、開基は大河内政勝、開山は日榮上人なり。

正信山妙傳寺　小石川原町に在り。駿河蓮永寺末派にして、慶安五年の創立、德川頼宣の開基、日禪上人の開山なり。妙見堂あり。高祖大菩薩安置。

泉光山蓮華寺　關口臺町に在り、駿河富士郡本門寺末也。萬治元年の創立、増山彈正少弼正利の母を開基とし日優上人を開山とす。

通玄院　本傳寺末、涙切不動明王安置。建長五年の春、伊世の宮川に水まさりし時、老翁來つて我れ水を切術あ

りて高祖を渡し、住所は小幡の山寺に在りと云ひて去る。祖師之を尋ねたまふに、安置不動尊水にぬれ給ふ、則ち涙切不動尊なり。

大野山本淨寺　本傳寺末なり、七面大天女安置。身延のものと同じ、日本只二體なりと傳ふ。

鬼子母神出現所　雜司ヶ谷本淨寺前坂下清土にあり。

本郷區內寺院

本妙寺　德榮山惣持院と稱す、菊坂町に在り。維新前は中本寺にして、勝劣派の觸頭也。日慶上人の開基にして元龜二年の創立、明暦三年の大火は本寺の本郷丸山にありし時、起りしものにして、火元本寺より出で、江戸市三分の二を烏有に歸せしめたるより、世に丸山本妙寺火事と呼べり。奪子院に本立院、正本院、本行院、妙雲院、圓立院、東岳院本藏院あり、寶物亦頗る多く、境內に久世廣宣及子廣之の墓あり。

寂靜山大恩寺　根津西須賀町に在り、中山法華經寺末也。寛永元年創立、日賢上人の開基なり。

浩妙寺　駒込蓬萊町にあり、伊豆玉澤妙法華寺末也。寛永五年太田資宗姉開基、日遵上人の開山なり。

高耀山長元寺　駒込蓬萊町にあり、身延山の末寺なり。寛永四年の創立、日長上人の開山、加州侯吉德母預玄院の開基なり。

妙光山奥善寺　丸山にあり、靈夢高祖大菩薩安置。

感德山大恩寺　榮久大善神安置。

福昌寺　重乾遠三上人隨身佛願滿大黑天安置。

稲荷山靈感院　巣鴨に在り正面稲荷社。

下谷區内各寺院

勸明山法養寺　南稲荷町にあり、池上本門寺末にして、天正六年日等上人の開山なり。

蓮城寺　北稲荷町に在り、下總本土寺末なり。初め淺草阿部川町に創立し、享保十二年現地に移る、日元上人の開山なり。

法林山蓮華寺　下谷下車坂町に在り、元和四年日賢上人の開基、京都妙滿寺末の顯本法華宗也。俳人夏目成美の墓あり。

宗賢寺　池の端七軒町に在り、身延山末也。元和五年の創立。日受上人の開基なり。毘沙門堂あり、傳教作と傳ふる毘舍門安置。

大正寺　池の端七軒町に在り、京都妙覺寺末也。慶長の頃、日亮上人の創建、寺内に川路左衛門尉聖謨の墓あり。

長昌山大雄寺　谷中町にあり、伊豆玉澤法華經寺末にして、慶長九年の建立、開山は日逵上人、傳教作摩利支天皇あり、名士高橋泥舟、考據學者吉田篤敦の墓あり。

感應山常在寺　谷中三崎北町に在り、御鏡日蓮大菩薩、子育鬼子母神安置。

此常花寺の尊像は伊豆伊東講居の折、領主莊司朝高流行惡病に極り宗祖に讀經祈念を願ふ、高祖即ち讀經祈念せしに重病立所に癒ゆ。弘長三年敕免の折、高祖鏡に向ひ自像を刻し朝高に賜ふ。朝高之れを同地法華堂に安置し後寛文十年故ありて當山に移す。鬼子母神は日逵上人弟子日護上人に命じて彫刻せしめ、養珠院の生毛を植ゑ子孫擁護と開運厄除の祈願を籠給ふ。

高光山大圓寺　谷中三崎町に在り、本所法恩寺末也。日授上人を開基とす、笠森稲荷ありて世に知らる。

妙圓寺　谷中三崎町に在り、亦法恩寺末也。寛永八年日恕上人の開山なり。

龍江山妙法寺　谷中三崎町に在り、中山法華經寺末にして慶長十三年創立也。初め神出に在りしを承應元年谷中茶屋町に移し、元祿十六年今の地に移る。日恕上人を開山とし日禪上人を中興とす。

日長山領玄寺　谷中坂町に在り、身延山末也。慶安四年領玄院日長上人の中興也。昔時享師櫻(日亨植ゆ)と稱する櫻あり、十月花を開くより、俗に會式櫻と曰ひたりと云ふ。

長興山立善寺　谷中坂町に在り、野州佐野妙顯寺末也。元和三年の創立にして、元和八年下谷金杉に移り、明暦二年他に移り、貞享元年此に移る。日榮上人を開山とす、鬼形鬼子母神あり。

常親山安立寺　谷中三崎北町に在り、寛永七年の創立、目養上人を開山とす、京都本法寺末なり。

日照山長明寺　谷中初音町四丁目に在り、京都本國寺末にして、慶長十四年の創立、開山は日長上人なり。

妙祐山宗林寺　谷中初音町四丁目に在り。駿河に於て德川家康の茶道たりし齋藤宗林の開基なり。祖師像あり。俗に船守祖師と云ふ。

光照山感應寺　谷中上三崎南町に在り。こゝに安置せる尊像は、桓武天皇の勅命に依て傳教大師彫造せるもの、天皇東征の砌、此尊像を陣中守護の靈神となせし故、初め征夷毘沙門と云ふ、代々の天皇篤く之を崇信し、清和帝之を王子貞純親王に賜ふ、親王其子經基に傳へ、又是を滿仲へ傳ふ、故に多田毘沙門とも云ふ。爾來源家相傳へ、文明九年同族森織部の家に奉從せしも、元和九年森織部源義安靈夢に感じて、常山を建立す、もと神田にありしが後今の地に移る。眞間弘法寺末なり。

慈雲山瑞輪寺　谷中上三崎南町に在り、身延山末にして、天正十九年の創立、開山を日新上人とす。往時日蓮宗兩派觸頭七組十五ケ寺の筆頭たり、舊支院十五坊にして、現存するもの五坊あり。祖師堂あり、祖師自作の木像を安置す。俗に飯匙の祖師と唱へ出産に靈驗ありといふ。珍藏の寺寶少からず。大沼枕山、河鍋曉齋、井上毅、山田武市の墓あり。

妙見山本立寺　谷中上三崎北町に在り。永和三年の創建、日惠上人を中興とす。京都本國寺末なり。

運立山養傳寺　谷中上三崎北町に在り、身延山末なり、日立上人を開山とす。本寺を世に谷中の鶯寺と云ふこと改撰江戸志に見ゆ。

妙宣山德大寺　上野町にあり。大摩利支天を安置す。緣日は毎月亥の日。

法住山要傳寺　坂本三丁目にあり。妙見大菩薩安置。

本光山覺性寺　池の端にあり、鬼子母神安置。

榮源山本壽寺　根津川ばたにあり。感應日蓮大菩薩安置。

三光山妙傳寺　谷中坂下にあり、毘沙門天王安置。

長源山本光寺　三崎町にあり、人頭大明神安置。

顯壽山佛心寺　三崎町にあり、高祖御自作、毘沙門天王安置。

長光山龍泉寺　谷中初音町三丁目に在り、下總眞間弘法寺末なり。元和七年の創立、開山は日感上人、高祖自作尊像あり。

大法山一乘寺　谷中坂町に在り、上總妙光寺末也。日僚上人を開山とす。高祖眞筆の本尊並に日親日遠兩上人の眞筆を藏す。境内に太田錦城の墓あり。

大行寺　谷中坂町に在り、圓妙寺と號す、本所法恩寺末也。日感上人を開山とし、天正十七年の草創とす。傳教作毘沙門像あり。

寶塔山感應寺　下谷入谷町に在り、駿河駿東郡光長寺末也。萬治二年利兵衛なる者開基し、日融上人を開山とす。日法上人の開山なり。

佛立山眞源寺　下谷入谷町に在り、駿州駿東郡光長寺末也。初め相州にありしが、慶安三年並に移る。日能上人眞作高祖開眼と傳ふる鬼子母神像あり、世に入谷の鬼子母神と稱して高名也。

本立山長國寺　下谷龍泉寺町に在り、上總鷺山寺末也。寛永七年の草創、開山は日乾上人、開基は坂本傳右衛門と云ふ。鷲神社は元と本寺内に在り。開運妙見大菩薩、其他の寺寶あり、吉田文魚の墓あり。

大乘山長運寺　谷中三崎町に在り、感應鬼子母神を安置す。大磯虎ケ石あり。

石岡山妙福寺　谷中三崎町にあり、鍋冠日親上人像安置。

六浦山延壽寺　谷中三崎町にあり。

寂靜山蓮華寺　谷中三崎町にあり、清正公神祇安置。

鈴仙院　瑞輪寺々内、子安鬼形鬼子母神あり、毎月八日午前中法樂加持、土用丑の日頭痛ほふろくきう執行。

本妙院　同所に在り、開運妙見大菩薩。

久成院　同所、妙法大善神安置。

立光山正運寺　谷中に在り、鬼子母神安置。

榮照山龍國寺　谷中に在り、妙見大菩薩安置。

松榮山福相寺　谷中に在り、もと眞言宗なりしが、住僧鍋冠日親上人と法問に及び屈服して改宗す。

關妙山善性寺　下谷中に在り、三十番神安置。

如法山長善寺　下谷中に在り。

自然山妙陽寺　下谷中にあり。日法上人作高祖大菩薩安置。

淺草區內各寺院

本藏寺　北松山町に在り、京都妙顯寺末也、元和八年の建立、開山は日東上人なり。

妙法山玉泉寺　北松山町に在り、身延山末に屬す、開山は日蓮上人、寛永元年の建立なり、寺に出世毘沙門天あり、傳教大師作と云ふ。

妙盈山法泉寺　淺草永住町に在り、池上の末寺也。文祿四年日雄上人の開基に係り、正保元年矢の倉より移る。

大光山善立寺　淺草永住町に在り、天正十九年日得上人の開山にして、身延山の末寺也。慶安元年神田より此に移る、舊子院に東陽院あり、高祖の曼荼羅一幅及同消息二幅を藏す。

善福山盛泰寺　京都妙滿寺末、文祿三年、日國上人の開基なり。正保元年、野寺町より今の淺草永住町に移る。

壽量山妙經寺　淺草永住町に在り、京都妙滿寺末にして、日淨上人の開基なり。

長昌山經王寺　永住町にあり、元和元年の創立にして、法華演哲阿闍梨日說上人の開基なり。勸請日朝上人の像は、往昔池上本門寺歷代日純上人幼少にして眼病を患ひ、日朝上人の本誓を祈念するに旬日ならざるに平癒なしければ、妙經一百部を讀誦しつゝ自ら尊像を彫刻し、生涯奉侍す。本門寺歷代相傳へ、日說上人に至りしなり。爾來日朝上人の靈驗日に新に眼根淸淨の利益著し。

法乘山蓮妙寺　永住町に在り、慶長九年矢の倉より此地に移る。文祿二年日秀上人の開基、池上の末寺なり。

安立山長遠寺　池上本門寺末なり。文祿三年日瑞上人の開基にして、高祖眞作の自像あり、文祿三年此寺に遷すと云ふ。

頂光山蓮光寺　永住町に在り、身延山末寺にして、文祿三年日寶上人の開基する所、正保元年矢の倉より此に移る、有名なる高祖自作の開運大黑天を安置す。壽量品中、大黑尊天は身體何れの疾病も必ず癒すと云ふ御誓文に基き、毎年土用の丑の日衆生に頭痛霜燒の禁厭を施す、乞ふ者夥し。

皇頂山妙福寺　身延山末なり。文祿元年日慈上人の開基する所にして、永住町にあり。

妙盈山善慶寺　淺草永住町に在り、池上の末寺也。文祿四年日泉上人の開山にして、日叡上人の開基なりと云ふ。

眞立山正覺寺　池上の末寺なり、文祿元年日要上人の開基にして、淺草南松山町にあり。

宗延寺　淺草神吉町に在り、身延山の末寺なり。天正十九年相州小田原より移る、開山は日精上人と云ふ。

實相寺　松葉町に在り、池上の末寺也、天文十八年の創建、開山は日經上人なり。

龍鳴山本覺寺　京都本國寺末、天正十九年の草創にして、日覺上人の開基なり、日限願滿日蓮堂あり。

妓樂山妙音寺　松葉町に在り。駿州有度郡運永寺末にして、慶長五年の創建、日雄上人の開山なり。讀經高祖大菩薩、池の辨財天安置。

實相寺　淺草榮久町に在り、誕生寺末也。慶長十六年日見上人の開基するところ。

大仙寺　高原町に在り、池上の末なり。文祿四年日堂上人之を開基せり。

長瀧山本法寺　淺草高原町に在り、下總本土寺末にして、寺内江川太郎左衛門の墓あり。

法立山常福寺　淺草吉野町に在り、上總山邊郡東金村東衡寺末にして、永正八年の創立、日立上人の開山なり。

正法寺　淺草吉野町に在り。誕生寺の末、文祿元年の創立にして、日位上人を開山とす。

妙光山圓常寺　淺草吉野町に在り。京都妙滿寺末にして、元和二年の創立、日逞上人を開山とす。

安盛寺　吉野町に在り、京都妙滿寺末なり。初め日好上人其俗兄千葉安盛の爲め、總州北山谷城内に創立し、寛永元年此に移す。

深榮山長昌寺　淺草今戸町に在り、身延山の末寺にして、弘安二年の創立、日寂上人を開基とす。加賀美氏の江戸砂子書入に據れば、弘安五年淺草金龍山の別當寂海、日蓮宗の日常と此に法論し、雌伏して日蓮宗に改め、高祖の弟子

となり一寺を建てしもの本寺なりとあり。珍藏せる寺寶多し、又本寺藏する所の正觀音は、即ち淺草寺の觀音像にして、弘安二年淺草寺の寂海轉宗の時之を帶出せるものなりと傳ふ。問答の舊地地紙形の芝地あり、是に仍つて扇芝云ふ。毎年十二月四日御すゝ拂に付き庫裡にて開帳す。

妙高寺　誕生寺末にして、淺草今戸町に在り。日立上人の開山、寛永三年の創建なり。

本性寺　玉姫町にあり、京都本能寺及び攝津尻ヶ崎町本興寺末の日蓮宗なり。慶安四年の創立、日逵上人の開山なり。

慶印寺　淺草新谷町に在り、京都妙滿寺の末寺なり。天文五年本山妙滿寺の二十世常樂院日經上人之を豐島郡千代田村に創し、常樂寺と號したりしが、日經上人不受不施を主唱して、德川家康の勘氣を受け、加賀に走りしより一旦廢寺となれり。元和元年小野一刀齋忠明（劒術小野派（一刀流開祖））の次男、慶印、知足院日忠上人之を再興す、即ち本寺なり。

妙祐山幸龍寺　新谷町に在り、天正十九年日椿上人の開基にして、京都本國寺の末なり。寺内に鶴賀若狹椽の墓あり。

鷲在山長國寺　田甫に在り、開運酉の市元祖、鷲妙見大菩薩を安置す。毎年十一月酉の日千卷陀羅尼を修す。

本所區内寺院

正覺山妙源寺　本所番場町に在り、野州妙顯寺末寺にして、嘉元二年の起立、天目上人の開山なり。番神堂に元と上州館林の城主松平武元建つる所の鳥居ありさ。安積民齋の墓あり。

照法山本久寺　本所表町に在り。下總本土寺末にして、元龜二年日朗上人の開山なり。日朗上人作開運日蓮大菩薩像、日朗日法兩上人作村雲隨身敷馬女の尊像あり。御なぜ守御符等を出す、又開運水と云ふ目藥あり。

實相寺　表町に在り、下總本土寺の末なり。慶長二年日澄上人の開山、鬼子母神堂に傳教作と傳ふる鬼子母神、熊谷堂に熊谷文殊菩薩像、祖師堂に高祖岩懸像を安置す。

正榮山妙緣寺　中之郷原庭町に在り。駿河國大石寺末にして、寛永六年日舜上人の開山なり。

覺英山清雄寺　中之郷元町に在り、京都妙滿寺末、寛文二年酒井忠勝の開基、開山は日崇上人なり。

久遠山常泉寺　向島小梅町に在り、駿州大石寺末なり。慶長元年日興上人の開山、日是上人の開基とす。朝川善庵の墓あり。

妙榮山本法寺　太平町一丁目に在り、京都本國寺末にして文祿四年日慶上人の創建。寺內に成島錦江、同司直、同柳北の墓あり。

平河山法恩寺　本所太平町にあり、京都本國寺の末寺にして、長祿年間太田道灌の創建、日住上人を開山とし、中興を日定上人と云ふ。武德編年集成に據れば、天正十八年七月小田原役豐臣秀吉江戸を過ぐるに當り、德川家康爲に本寺に旅營を設くと云ふ。日法上人作高祖木像、太田道灌作妙法金毘羅威王大善神木像を藏す。同寺中に法泉院、千榮院、陽運院、善行院あり、又太田道灌以下の石碑あり。

永降寺　本所太平町に在り、慶長十七年の創建にして日義上人を開山とす。京都本能寺末にして、關東觸頭なり、寺內に大黑天堂あり、高祖開眼と傳ふる石像を安置す。

安樂山本佛寺　本所太平町一丁目にあり、身延山末にして、寛永八年の創立、開基は日通上人と云ふ。寺內鬼子母神堂に子授鬼子母神の木像を安置す。

能勢妙見堂　本所横川町に在り。安永三年幕士能勢頼宣其食邑攝津より妙見佛を移して之を創建せり。明治の初め上地となりしが、七年能勢頼哲地を買ひて之を保存す。本尊妙見像は日乾上人作と傳へ、外に能勢鳴稻荷大善神石像及び日乾上人筆板本尊あり。

天正山最教寺　本所押上町に在り、身延山の末寺なり。天松山慈到院と曰ひ、慶長元年創建し、開山は日境上人開基は日崇上人なり。日進大士筆蒙古退治旗曼荼羅を藏す、又宇都宮貞綱其他の遺書あり。

長養山春慶寺　本所押上町に在り、元和元年日理上人を開山とす。身延山の末寺にして、普賢堂には推古朝百濟僧觀勒の將來なりと傳ふる普賢像あり、開運の普賢と云ふ。脚本家鶴屋南北四世の墓あり。

妙見山法性寺　柳島元町に在り、下總眞間弘法寺末にして、妙見山玄和院と號す。日瑞上人を開山とす。有名なる妙見堂あり、長一尺斗りの妙見像を安置す。靈驗ありと傳へて養者多く、例月十五日廿八日の緣日の如き人出最も多し。

日珠堂　小泉町に在り、日朝上人の作、日珠大善神を安置せり。

小梅常泉寺　本所區小梅町にあり、富士派に屬し別格寺跡なり。慶長元年仙樹院日是上人天臺宗を改めて當寺を創す。八世大本坊日顯上人は、德川六代將軍家宣公の御臺所、從一位天英院殿の護持僧にて歸依淺からず、すなはち其外護に依て大に舊觀を改めたり。中門と本堂との間に老松あり、蜿蜒百餘坪に亘る、近衛忠熙公花咲松と命名す。

當山は明治三十三年六石寺分離後、富士派の第二教區宗務支院となれり。

清正公大神祇　清正堂　表町六十二番地にあり。

深川區內寺院

法苑山淨心寺　舊幕府の老女三澤の開基、淨心は即ち其法號なり。身延山末寺にして靈岸町に在り。明歷三年の創建、開山は日義上人と云ふ。葛西志に圓珠院內加藤清正首題一幅を藏することを記し、其眞蹟なるべしとの辨あり。矢部定謙、元祖清元延壽太夫、元祖坂東彦三郎、手柱岡持の墓あり。當山寺中には左の子院あり。

圓降院（開運三面摩利支天、會式十月八、九日）玉泉院（施餓鬼七月十日、會式十月八日）本立院（出世日蓮大菩薩、施餓鬼七月二十四日）喝行院（施餓鬼七月二十一日）一乘院（施餓鬼七月七日華得坊日得上人會式十月二十一日）善應院（施餓鬼七月十九日。子育鬼子母神會式十月十八日）圓珠院（清正公大神祇會式十月十日）宣明院（施餓鬼七月十六日。上行菩薩）。

立野山慈眼寺　深川本村町にあり、常陸久慈郡稻本村久昌寺の末寺也。元和元年日盛上人の開基にかゝり、高祖曼荼羅を藏す。墓には洋畫家の祖司馬江漢、槍術家生田新五衛門、眼鏡師淺岡泉、及び浦里時次郎の比翼塚あり。

（備考）麹町區內及び神田區內には本宗に屬する寺院なし。

《東京府下》　荏原郡內寺院

八幡山法蓮寺　荏原郡平塚村字中延にあり、本寺は宗內有數の古刹にして、中老僧朗慶上人の開創なり。上人の父、荏原義宗此地の領主たり、高祖の敎化を蒙り、終に其一子を門下となせり。荏原氏世々八幡大菩薩の像を藏む、こは源氏の祖賴信朝臣寛仁年間靈夢に依つて感得し、累世是を守本尊とし相傳て義宗に至る。義宗之が點眼を高祖に請ひ、高祖開光して之を朗慶上人に授け玉ふ。義宗の沒後、地を中延の邑に卜し、一精舍を搆へて神像を奉安す、是れ法華勸請の神社の發軫なり。後德川將軍家の歸依あり、中延八幡の名遠近に聞ゆ。

實相山正覺寺　目黑村にあり、本寺は元和元年法泉院日榮上人の草創にして碑文谷法華寺の末なりしが、同寺廢滅の後、身延の末寺に屬す。四世日猷上人京都紫竹常德寺より來り住し、學德一世に高く、當山中興の祖とす。陸奥の大守伊達綱宗の側室淺岡の局（政岡と稱し仙臺萩にて人に知らる）深く上人に歸依し、沒後其邸を擧げて當寺に寄付す、今の本堂庫裡客殿是なり。刹堂に安置する鬼子母神は傳敎大師の作にして、淺岡局の墓は本堂の脇にあり。來厄除の靈神として其名高く、參詣絕ゆる時なし。

本光山本照寺　品川宿にあり、鬼子母神安置。

白鷺山海德寺　品川宿にあり、大明神安置。

實相山蓮長寺　品川宿にあり。開運筮高祖大士安置。

鳳凰山妙國寺　品川宿にあり、弘安八年中老僧天目上人の草創する所なり。上人は美濃阿闍梨又上法房と稱す。鎌倉の人、三浦氏にして、高祖滅後圓極實義抄を著し、初めて本迹勝劣の義を唱へたり。永享の頃、品川の人品川八郎三郎國友、前上總助定景、文安の頃、領主沙彌道胤、獸人鈴木光純等深く當山に歸依したり。

豐多摩郡内寺院

如意山亮朝院 戸塚村高田に在り、堀部安兵衛仇討にて名高き高田の馬場は本寺の近傍なり。境内廣濶頗る眺望に富む。開山は亮朝院日暉上人にして、寛文年中の創立に係る。上人身延に在て七面天を尊み、自ら其像を刻む。當山勸請の尊像是なり、世に身延の七面天と共に之を一木三體の靈像と稱す。德川四代將軍家綱の侍女上人に信依し、資を投じて一堂を建つ、今の七面堂なり。往昔大久保村にありしを天保年間今の地に移せり。祖師の御眞筆、家綱公の懷刀、同公筆七面天の畫像あり。境内の二王尊石像は上代美術の精巧を極め、左方の石像は之を打てば金聲を發し、諸人奇異とする。

法雲山東漸寺 又仙壽院と稱す、千駄ヶ谷にあり。紀州家の祖頼宣卿の草創にかゝる。卿の母堂養珠夫人お萬の方は德川家康公の側室なり、家康公他界の後、靈夢を感じ、地を掘りて高祖自作の鬼子母神を得たり。偶々夫人の生家に里見久遠なるもの、宗門に入りて日遙といへる幼僧あり、夫人之を掬育し、正保元年地を青山に卜し、先に感得したる鬼子母神を祀り、日遙を開祖として一宇を創建す、是れ當山の始なり。爾來毎年正五九月を以て大祭を執行す。

北豐島郡内寺院

日遙山妙隆寺 日暮里村に在り、下總中山法華經寺の末寺にして花見寺と云ふ。寶永元年日遙上人鎌倉小町村より來りて草創すと傳ふ。元祿七年谷中玉林寺の境内より移る。寛延元年の頃、境内の丘陵に數多の躑躅を植しより北郊の名勝となる、

谷中延命院 日暮里村に在り、寶珠院と號す。慶安元年の創立なり。固と淨土宗寶珠寺の古蹟なりしが、惠照院日長上人身延七面山に參籠して秘法を感得し、當山を開基す、時の身延貫主寶藏の七面天女を以て日長上人に授く。偶々家

光將軍の側、三澤局懷妊し、日長の祈禱を受け、男子を生む、四代家綱是なり。爰に於て壯麗なる堂宇を新築し、以て永代の祈願所とす。貞享年中黄門義公、屢々參拜あり、傍ら水戸の祈願を囑す。爾來數度の類燒に罹り、其都度將軍家及び水戸家によりて再建せらる。戊辰の役兵燹に罹りしが、二十九世日妙上人之が恢復を計り、現今の隆盛を觀るに至れり。

長光山龍泉寺 谷中にあり、安置せる高祖大菩薩の尊像は、往昔御弟子最蓮坊日榮上人に加持祈禱三大秘法を御相傳ありて御別かれましましける時、高祖自ら彫刻し、授與し玉ふ所なり。

運啓山修性院 日暮里にあり、大布袋安置。

大黒山經王寺 日暮里にあり、開運大吉久天。

長久山本行寺 日暮里にあり、太田道灌斥候の塚あり。

清慶山本立寺 高田村字雜司ヶ谷旭出に在り。善學院日詠上人の開山、芝田正之の開基なり。中興開山日意上人の世、高田藩主榊原家の裏菩提所となる。創立年月日不詳。身延山の中本山にして支院清玄院あり。現主は山田潮進師。

威光山法明寺 高田村字雜司ヶ谷旭出に在り。弘仁元年慈覺大師の創立にして眞言宗稻荷山威光寺と稱し、源家の御祈所なりしが、正嘉元年中老僧日源上人當地弘法の砌、時の座主僧圓該宗に歸依し、轉衣授戒して寺を威光山法明寺と改稱す。以來宗門弘通の道場として世に知られ、傳燈四十六世、六百五十年の今日に及ぶ。德川三代將軍家光より朱印を賜はり、代々昇堂の節は目見得拜領等あり。所藏の什寶珍品少なからず。寺は中本山にして、塔中四院末寺十四院を有す。寺内安置の鬼子母神及び威光稻荷の名遠近に聞え、靈驗感應のいやちこなるは遍く人の知る所なり。石の仁王は和田戸山盛南寺よりうつす。金燈籠は牛込千部講の奉納なり。

不動山寶城寺　北豐島郡高田村字雜司ヶ谷にあり。本寺は祈雨日蓮大菩薩を安置し、旱魃の年常に雨乞を爲す、利益顯著なりといふ。開山は寶城院日道上人、寶歷年間の創立にして、伊豆玉澤法華經寺末なり。中頃維持困難の爲め本堂を始め、都て縮少せしが、現主橘高智然師本堂再築の準備をなしつゝあり。

南葛飾郡内寺院

天靈山妙久寺　砂村字八右衞門新田に在り、慶安三年安房小湊山十六世日領上人の開山なり。上人初め一寺建立の祈願を起し丹精すること數年、或夜夢に天靈妙久の四字を尊像自ら給ふと感じ、其後同夢を視ること三夜なり。夫より靈生寺を十七代貫主に讓り、東都江戸に出て一寺を建立し、天靈妙久の四字を寺號山號となしたるものなり。當山安置の開運感應日蓮大菩薩は中老日法上人の作なり。明治四十三年改築、庫裏鐘樓は現主日昇上人は勿論、世話人杉田定次郎並に木由太郎氏等の甚深なる信仰に依て成る。

最勝山上妙寺　砂村荻新田に在り。現主本實院日慈師は、正中山第三行相傳驗者なり。下總平賀本土寺末にして、當寺の開其荻某は大和國平方村の人なり。元和年間同胞三人と共に來り、瓶鉢を開く。荻新田は長兄の拓く所長兄老年に及び一寺を建立し日財上人を開山となす。其後海嘯ありし際、境内の椎の古枝に、鬼子母神の尊體繫留せらる、爾來海中出現子育鬼子母神と崇め毎月八日開帳を執行す、殊に正五九月二十八日の大祭には詣者雄沓を極はむ。

第二　日蓮宗講中由來

江戸に於ける講中の起原は、德川幕府の初期にあり。德川將軍入城の際、江戸市中には既に多くの法華信者ありしが不受不施の亂ありて一時は衰微の兆ありしも、頓て法運開け、元祿以降には漸く諸本山の出開張をなすものあるに至りぬ。之が爲め、信徒は相糾合して寺院との連絡を圖るの必要を生じ、江戸全市に亘りて妙法講なるもの組織せられたり。

其後信徒の數は益々增加し、各々其の町名を記せる旗を立てゝ標章となし、遂には町名を以て講の名となすに至れり。かくて文化四年身延開張の際には既に拾七講、文政七年の開帳には增して四拾一講となり、天保元年には更に增して六拾四講となれり。現今東京市内に於ける講中は殆ど四百を以て算ふと雖も、其の當時の講中の連綿として存續せるものは、神田講、兩國東西講本郷講、等、僅少の數に過ぎず。然かも其の講中は、後身は殘れるも名稱は殆ど變更せられ居れり。例へばかの本郷講中が、本郷唱導結社となり居れるが如し。

（備考）日蓮宗にて特に「講」の字を「講」と書くの慣習あり。然れども其根據は詳かならず。

前述の如く、東京に於ける現在の講中は殆ど四百に上れるが故に、本書の限りある紙中に之

を詳記する能はず。仍つて茲には講中の重なるものを網羅せんことを期し、尙ほ調査の及ばざるは版を重ぬるに從つて追補せんと欲す。

先づ各講の由來を記するに當り、參考として本所區薮敎寺に存せる懸軸の記錄を揭ぐべし。こは往時各講中が、身延山祖師像開張の際、其の送迎に用ひたる幟の數を調べたるものなれば、講名は固より、又幟の數によりて講の盛衰を想像するの便ともするを得べし。

(一) 文化四年の調査

乍恐別紙以書附奉申上候。御尋に付江戸諸講中幟數并に年月等左に奉申上候。

文化四卯年七月甲州身延の久遠寺祖師日蓮之像於深川淨心寺開帳に付送迎之節より相用來候事

幟貳本	內神田講中	幟貳本	外神田講中
同壹本	兩國東西講中	同壹本	日本橋講中
同壹本	中橋講中	同壹本	芝口橋講中
同壹本	京橋講中	同壹本	挽鐵砲淵
同壹本	本郷講中	同壹本	本郷講中
同四本	湯島講中	同壹本	麹町講中
同壹本	石町講中	同壹本	靈岸島講中
同貳本	八丁堀講中	同壹本	御藏前講中

同拾八本　本所深川講中

(二) 文政七年の調査

文政七申年三月甲州身延久遠寺祖師日蓮之像於深川淨心寺開帳に付送迎之節より相用來候事

幟壹本	富澤町講中	幟壹本	土橋講中
同三本	芝田町三田講中	同壹本	櫻田講中
同貳本	駒込千駄木講中	同壹本	根津講中
同拾本	下谷淺草講中	同壹本	坂本金杉講中
同貳本	花川戸山之宿	同壹本	谷中講中
同壹本	小石川春日町富坂	同壹本	音羽講中
同壹本	牛込講中	同壹本	赤坂講中
同三本	四之久保久保町	同壹本	二本榎長坂町
同壹本	麻布市兵衛町	同四本	品川講年
同壹本	牛込赤坂講中	同壹本	同津久土講中
同壹本	高輪講中	同壹本	馬喰町講中
同壹本	小網町講中	同壹本	御藏前代地

(三) 天保元年の調査

天保元寅年七月甲州身延久遠寺祖師日蓮之像於深川淨心寺開帳に付送迎之節相用候事

幟壹本	下谷芳町講中	同壹本	下谷十四日講中
同壹本	箕輪新町講中	同壹本	大塚講中
同壹本	雜司ヶ谷講中	同壹本	雜司ヶ谷四谷町
同壹本	市ヶ谷講中	同壹本	鮫ヶ橋講中
同壹本	青山講中	同壹本	新宿講中
同壹本	堀之内講中	同壹本	青山權田原講中
同壹本	麻布十番講中	同壹本	大森講中
同壹本	牛込榎町講中	同壹本	大久保講中
同壹本	淀橋講中	同壹本	目黑講中
同壹本	池上講中	同壹本	築地講中
同壹本	小塚原講中	同壹本	槻戸講中
同壹本	淺草新町講中	同壹本	百五本

右之通に御座候

一先達而以書附奉願上候拙寺旗曼荼羅虫拂之節江戸諸講中幟虫干爲致吳候樣相願に付其旨奉願上候處幟員數并年月等相認め差出候樣被仰付則取調候處前書之通に御座候尤其節講中之者共より小振之幟當日持參之者共も御座候得共右員數は相分兼候且又境内手狹之場所に付七日之間日々貳拾本宛相建虫干仕度奉存候依之奥書仕奉差上候以上

申七月　　本所押上

右は蓮敬寺より瑞輪寺、善立寺、及び宗延寺に宛て、報告するの形式となり居れり。

(一)神田八講

神田元講　講元は神田區平永町三須安五郎氏なり。此講の起りを記さんには、先づ神田講の起源を知らざるべからず。

德川八代將軍吉宗の代、公然江戸市内に出開帳を許るされたるは身延山、嵯峨釋迦、成田不動、三所に限られたり。仍て同治世中に初めて身延山開帳を江戸に執り行ふにあたり、江戸市民擧て旅所品川海德寺に出迎へたり。其人數餘りに多き爲め混亂甚しく鎭壓に困りたるの結果、取締りを設くるの必要を生じ、夫れには出迎人中神田市民最も多數を占め、且つ信者も亦多ければとて、終に神田の人を以て其取締に擧ぐることとなれり。然るに其目標となるべきものゝ必要あり、去りとて遽かの間に何物も調ふこと能はず、已むを得ず芝三田の三河屋と云ふ烟草屋の暖簾を借り受け、吳紛にて神田講中の名を認め、出迎の人々は盡く此暖簾を目印として從ひ來れと命じ、漸く其混雜を減めたり。これ則ち講社の因を爲したるものなりと云ふ。茲に於て神田元講を起し、爾來開帳送迎の場合には道案内として第一番に神田柿色幅を立てゝ先に立ち、夫に從て江戸各講社は順々に行列に就くことゝ定めたり。元は内、外、東、西、神田一團體なりしも、自々信者も增し從て講社も數多出來たれば八講となり、時としては十四五講ともなりたることあれども、最初八講を以て團體を組織したるに依り、講の多少を問はず八講の名を因襲し居るなり。

前記の如く神田講は送迎とも行列の先頭となれども、町同心十八人靈龕に付て神田講の先列となるは言ふまでもなし、柿色幅も今の如く堅幅なく暖簾其儘の横幅を用ふる慣しなりしも、後になりて堅の物に改めたり。若し他講中にて柿色幅を作るか、又は新講社の出來る場合は、神田講の承諾を受け、且つ其差圖に依て行列の順に立つことは今も昔に變る

ことなし。

神田八講と改め、講中の統一を謀りたるは、明治三年に元講、前の講元神田三河町村上米治氏先々代及び十三日講、前の講元日本橋區本石町三丁目三宅兵右衛門氏先代の靈力に由て組織し、左の順序にて行列に立つことゝなれり。迓迎共、以上の事實なるより、今日諸山の開帳は必ず神田八講、東京八講、東京十講にて萬端の世話することは昔日に異ならず。

（備考）公然の開帳は八代將軍の許可なれども開帳類似のことは三代將軍ころより行はれたるものと見ゆ。

東神田結社　講元は下谷區御徒町一丁目田中金八氏なり。此講は神田元講と同一體なりしも、講員多數にて統一上不便なれば、元講を西とし乙講を東としたるまでにて、他の點に變りなし。元講と行動を同うす。

神田市場講　三扇源次郎氏。此講は講元なく休みなり。

神田二十五日講　講元は神田一ツ橋通町篠塚龜吉氏なり。此講は約百五十年前の創立にして、堀の内山付き二十五日千部の時に世話を爲すより起れり。池上の御縁は本講より奉納するの定例なり、其他の點は八講皆同じ。

神田十三日講　講元は神田福田町平田松五郎氏なり。此講は元講に續いて組織したるものにて約貳百年に近き講社なり、行動は總て元講に同じ。

神田壽講　講元は神田區龍閑町杉山豐氏なり。此講は江戸壽講と唱へ、駿河屋七兵衛の創立したるものにて、今より約百五十年前の組織に係る。當時は堀の内山付きにて、開帳の折は本講第一番に拜禮を行ふものとす。一月元旦にも亦同じ其他諸山の開帳等は元講に同じ、幅順は第六番なり。

神田我身講　講元は淺草區永住町百二番地青木龍藏氏なり。此講は神田福田町伊藤清七の發起創立したるものにて

明治初年の組織に係れり。今の講元三代目に當り、講名は身我偶より取りたるものなり。其他の行動は神田八講と同じ。

神田和合講　講元は神田區相生町松本千藏氏なり。此講は往昔神田御同朋に於て諸山の開帳等の取締を爲し來りしも、維新後は後前の如く御同朋も無くなりしかば、同朋町に於て其取締を擔當するを得ず、仍て明治二十年頃神田末廣町足袋店中川氏に講元を預り、次に綴治安に讓り、又村松富吉事毛富氏に讓り、夫れより金澤事小林虎之助氏引受け、永く講元を勤めしが、目下松元千藏氏預り居れり。此講使用の幡は他講の如く柿色幡にあらずして、切幡なり。其他はすべて他講と異なる所なし。

神田池上取持講　此講は講元なく休みなり。

神田一心講　講元は下谷區御徒町二丁目福井幸太郎氏なり。此講は明治三十九年頃より我身講より分離し、講元先代の靈力に仍て組織したるものなり。元と先代久米吉は殆ど三十年來我身講の世話人を勤められたりしも、講内折合はず、意見の衝突を生じて分離したるものなるが、行動は他の講と毫しも變ることなし。

神田靈應講　講元は神田區和泉町安保彌三郎氏なり。此講は元と神田片滝講と唱へ、明治十八年頃の創立なり。其後外神田講と合併し、神田和合となる。靈應講は安保氏の靈力にて維持せられ、講名は身延山七十四代日鑑上人の與へたるものなり、身延片滝には毎年、柴又には庚申に參拜す、其他神田諸講と行動同じ。

神田御花講　講元は關龜次郎氏なり。由來詳かならず。

神田要言講　橘町通川岸松山與三郎氏は此講の熱心なる信者なり。此講は元祿年間深見要言氏の創立に係る。明治初年より松本氏講元を勤め「其後齋藤登助、山田勘助、大野安兵衛、清水市太郎の四人にて四十年來世話し來れり。

(二) 東京八講

本郷唱導結社 講元は本郷區本郷三丁目山本常吉氏、世話人影山喜太郎氏、松元喜之助氏等なり。此講は當區最も古き信徒の集團にして初めは只本郷と呼ばれ、追々に本郷の講又は本郷講中と云ひ其後稍秩序ある團結をなし、本郷講と呼び來りたるが、明治二十年頃より今の名稱となれり。其間盛衰度々ありしも、今の講元山本氏の努力に依り、僅かに十七八名に減じたる講員より二百餘名の大數講員を有するに至り、尚益々增員の勢ひなり、實に本講組織以來の盛況なりといふ。

本講の沿革を略記すれば、德川幕府の初め既に多少の信徒ありしが、元祿時代に至りて稍や團結の發端を見、文化文政の頃より講社の形をなせり。講社の創立には兼康祐悅氏最も力を盡し、かの有名なる本郷の大幡も此時代に出來しものなり。兼康氏は彼の「かれやす」までは江戸の内と俗謂ある舊家なり。明治二十年の頃御花講解散し、講員は多く本郷講に歸し、四菩薩の御幡も當講の守護となれり。講名改稱の由來は、明治二十年京都具足山妙顯寺が東京出開帳の際、貫主小林日董師より唱導弘宣正嫡の證として「勅賜四海唱導」の字を移して與へられたるが故なり。

御日傘講 講元は小石川區大門町十四番地吉田半兵衞氏なり。此講は德川氏江戸入城前後より始まり元と小石川講と唱へしが、京都瑞龍寺安置の宗祖靈像江戸下向の際、其靈像に御日傘を（稜折傘）差し懸けたるより、此講名を唱ふることゝなれり。此講成立以來殆ど四百年に及び、吉田氏は先代より講務を執り居れるなり。元來此講は他の出開帳には關係せざりしが、今は出開帳の際には蓮臺に御日傘を差掛けることとなり居れり。（御日傘に就ての御書附あれども略す。

小湊誕生講 講元は日本橋區箱崎町四丁目壹番地神尾昌太氏なり。本講は元と小網町講中と稱し、延寶年中の設立なり。眞弓一心師此講に對して少なからず盡力せしが、師は誕生寺の住職にて後に身延山に出世ぜられし日良上人に親しかりしかば、其緣故にて誕生寺に屬し、其外に日本橋區濱町清正堂にも隷屬し居れり。現在員約貳百名にして諸山靈像の出開帳の時は、膳綱を納むることの習慣あり。又身延、池上、誕生寺の諸山には常に香爐其他の奉納を缺かず。

身延取持講 講元は日本橋區濱町壹丁目七番地菅文次郎氏なり。本講は元と身延山最初取持講と稱したるが、古來當地に出開帳のある時は、先づ此講に於て萬端の世話を爲したるより、講名を取持講と唱ふるに至れり。東京の宗務に付いては、最初に本講に相談せざれば何事も爲す能はず。之れ本講の特色にして、又身延山代替りの際には直筆の曼荼羅を贈與せらるゝの例となり居れり。

吉原帝釋講 講元は淺草區田町一丁目小澤寅吉氏なり。此講は水引講と唱へしが、後に吉原水引講と改め、明治四十一年更に現今の名に改めたり。諸山の開帳に水引を奉納す。仍て水引講の名を唱ふるの基となれり。小湊片瀨等の水引は皆本講の納むる所、講員約百名あり。

身延最初赤坂結社 講元は赤坂丹後町四十七番地森川國三郎氏なり。本講は祖師入滅以來、池上大坊本行寺に於て毎年九月十八日入山會執行し來れるものに對し、殆ど二百年前より赤坂通夜講として同寺に詰むる慣あり、其外の諸山に對しては御花講と唱へ堀の内開宗の際御花圃を奉納し、此處にて作る花卉を日々奉納することゝなり來れり。文化十四年九月、身延山五十五世日逞し。身延山に對しては、山丈けの取持ちを爲し、御花を奉納することゝなり來れり。文化十四年九月、身延山五十五世日逞上人より改めて現今の講名を授けらる。天保年間、身延四谷及び追分等に石燈を献じたるは本講なり、但し都合上西谷石

燈は東京大林房に献立すること丶なれり。

東京八講の一部としては、赤坂賽錢講と稱し、諸山出開帳の際、送迎賽錢の取持に從事す。明治年間に至り本講は頗る衰微せしが、本講元森川氏世話人に擧げらるゝや、恰も明治二十八年深川淨心寺に於て大法會執行の折、赤坂講より出て大に盡力する所あり、爾來講務の爲め奮闘、盡力の結果、今日の盛況を見るに至れり。此外森川氏は池上燒失後、日龜上人の命を受け、東京牛込支部詰め山の手方面の主任となりて大勸財に勤め、明治三十六年には赤坂結社有志題目講を起し、四十年には身延年參赤坂有志と稱し總本山に參拜し纒て四十三年には本講靈場參拜赤坂有志と稱するものを起したり。かの堀の内水場は、元と芝櫻田講と合併奉納したるも、大破損に付き再び右櫻田結社と力を併せ更に奉納したるは當赤坂有志會なり。

芝蓮臺講　本講の由來は調査の便なかりし爲め省略せるも重版の際、詳細に之を記すべし。

兩國東西講　講元は日本橋區兩國藥研堀町大貫忠次郎氏なり。本講も亦調査の便なかりしが故に、遺憾ながら詳記するを得ざるも、重版の際を待ちて之を追補せんとす。

四ツ谷講　沿革未詳、重版を待つて詳記すべし。

(三) 市内諸講社

東京身延常經講　講元は日本橋區新乘物町大川吉兵衛氏なり。此講は委く云へば身延御眞骨常經講と稱す。起源は文化、文政の頃、長谷川町善綱講の有志にて毎年身延御眞骨常經料參拾兩を納めしを始とし、更に慶應年間に至り、建石、赤井、櫻井、大川伊藤等の篤志相謀り、基礎金を積み、明治拾年更に金拾五圓宛永代常經料として納め、之を以て本講の眼目となす。目下講員約三十名を有し、本講に對しては最も大切なる結社なり。鈴木文靜師專ら講務を代理せられつゝあり。

二本榎講　本講は芝區二本榎町一丁目七十五番地高橋繁次郎氏なり。此講は元と十五日講と稱し、高輪臺町宇田川氏講元なりしも、同氏死亡後は高橋氏講務を執り、講員約七十名あり。殆ど百年に近き舊講社にして、池上に屬し、諸山出開帳に常に若干の寄進を缺かず。

池上櫻花講　講元は芝區田町五丁目三番地高橋治之助氏、講務代理は芝區田町四丁目六番地高橋鶴三郎氏なり。此講は池上本門寺開山と殆ど同時に設けられし最も古き講社にして會式の際には、御花を奉納するの目的にて起れり。德川時代には、此講に備へある三寶の幡本堂に入らざれば、他講のものは、一切入るを能はざるほどの格式なりしが、中頃講元の交替あり、又維新後總ての格式廢れたるに依り、此格式も自然に廢るゝに至れり。御花を奉納すること今尙ほ往古と變らず、講員約五十名あり。池上の外、諸山の出開帳には關係ぜざる事となり居れり。

有志講　世話人は麻布區北日ケ窪町二十番地荒川十三郎氏なり。此講は目下講元を置かず、世話人にて講務を執れる八十年來の舊講なり。一時盛大を極めしも、中頃講元の怠慢によりて頗る衰へたりしが、荒川氏世話人となるや、非常なる幹旋努力の結果、今は從前に優る盛況を來たし、講員約八十名あり、皆熱心なる信徒のみなれば、益々盛大に赴き講員は唯り麻布區に止まらず、淺草、日本橋、神田、牛込、小石川、赤坂、芝等の各區に涉り、入講するもの多し。一時は題目講と唱へたるも暫くにして本講名に復せり。諸山の開帳には常に盡力を惜まず、熱心に贊助し居れり。

一心常經講　講元は麻布谷町六十二番地西條龜吉氏なり。此講は明治三十七年の設立にして、講員四百名以上あり。講元西條氏に依て此盛大を致し、池上本山境内旭堂の破壞したりしを修復し、今日の如き觀を做したるも亦西條氏の力なり。其他本山に對しては、絶えず力を盡しつゝあるなり。本講の重寶としては高祖示寂の時倚りかゝりたる柱にて彫刻せる高祖の尊像あり、本山日通上人より贈與されしものにて、本講の功勞に對し酬ひられたるなり。

大法講　講元は小石川區音羽町九丁目壹番地高橋安衛門氏、講務代理は西江戸川町大塚國次郎氏なり。此講は元と音羽講と稱せしが、大法山本傳寺の山號を取りて講名となせり。其音羽講の名ありしは、文化以前何れの結社も町名若くは郡村名を用ふるの例なりしを以てなり。現今音羽町より關口に掛けて講員多く、其數凡そ七十餘名なり。

牛込顯壽講　講元は牛込區改代町三十三番地中川常吉氏なり。此講は先代中川氏の組織せるものにて、明治四年頃の創立なり。始めは改代町一町内の講員を募りたるものなるも、今は牛込、小石川の兩區に誇り、講員併せて約七十名あり。

神田神通萬代講　講元は神田松下町和久井喜次郎氏、世話人神田同朋町一番地若林松五郎、神田錦町二丁目眞弓重五郎の二氏あり。當講は池上堀の内の兩山に屬し、もと神通萬代と二つの別講なりしが、明治四十五年一月より改めて今の名の下に合併し、講員約百餘名あり。會式の際は池上講中々道院を借り受け、妙字の幡を立てゝ目印となし、茲を講員の集合所となす。神通、萬代、兩講合併は若林、眞弓兩氏の盡力する所なりと云ふ。

市ヶ谷報恩講　講元は古井市藏氏にして、先代より引續き執務し居れり。本講はかの澤庵和尚と問答して名高き身延山三十三代日享上人の組織せられたる講社にて、今より約二百八十年前にあり。其當時は江戸八講の一にして（今の東京八講神田八講東京十講とは別なり）目下市内各區に散在する講社中の最古のものなり。其後時勢の變遷に伴ひ、講社も亦數派に分れたるを以て、本講も亦八講と分離し、今の講名の下に獨立したり。講員約八十名あり、講の古きにも拘はらず講員少なけれども、信心堅固なる人々にして身延、池上、堀の内等に在る古き諸道具には本講の寄進したるもの甚だ多し。元と牛込講と唱へたることあれども、同區内に數講新設を見るに至りしより、夫れと混同せざる爲めに名を改めたるなり。

本郷獅子王講　講元は本郷區東竹町五番地湯淺榮藏氏なり。此講は本郷講より分離し、嘉永元年槇本喜平治、松田眞二郎兩人の盡力に依つて本講名の下に成立し、當時は槇本氏講元を勤めたり。講名は經文より取れりと云ふ。此講も他の例に洩れず、維新の際殆ど瓦解せしも、安川政太郎氏の盡力にて中興し、同氏暫く講元を勤めしが、後現講元に引繼けり。講員約六十名にして、池上會社の際は大坊院を休息所となし、身延にては學林坊を之れに充つ。

池上長榮天常燈講　講元は淺草區福井町壹丁目十九番地三谷代五郎氏といふ。此講は日本橋區大坂町高島屋及び田中氏、濱町豐田氏等申合せ、明治三十一年中池上へ額を奉納したる際、講社組織の必用を感じ、芳町見番連、及び下谷數寄屋町見番連にて創立したるなり。其時は芹澤鐵五郎氏講元を勤めしが、同氏死亡後、現講元に引き繼げり、世話人は芳町數寄屋町見番にて勤め、他よりは一人の世話人をも出さず、結局本講は藝人藝妓等の講員多きを占め、目下七十餘名にして頗る盛大なり。長榮天の附屬講社は本講と建榮講との二講を以て始とす、毎年中洲に於て川施餓鬼は、松本氏の發起なれども、芳町數寄屋町の見番主として斡旋すると共に、此講も亦大に盡力しつゝあり。

日本橋十三日講　神田區和泉町鈴木文靜氏の支配の下にあり。當講は慶應年間の創立にして、堀の内妙法寺の千部を勤むるを以て眼目とし、目下講員約五十名あり。文靜師は講元にあらざるも、師の管理に屬す、講元と同樣の斡旋を執ら

れつゝあり。

堀の内千部講　講元は神尾昌太郎氏なり。堀の内妙法寺にては、何れの講中よりも大提灯の奉納は一切受領せざるの定めなれども、本講に限り殊に大提燈六張を奉納しあり、本講は今より五十年前の創立にして講員六十名餘あり。

堀の内安榮講　講元は東京府下北豐島郡高田村字高田松岡菊三郎氏なり。此講は元と日本橋區馬喰町千部講社と唱へ、文化年代以前に出來たるものにて、行德船橋等も合して堀の内千部を勸め來りしが、追々世話人等の代りたると、講元の熱心足らざりしより、近年甚だ振はざりき。然るに先代金五郎氏講元となり、妙法寺上人より安樂講の名を與へられし以來、頗る面目を改めたり、元來行德、船橋は遠路なるより、千部を勸むる毎に辨當等は講元にて世話するの例なりしが、近來之を止め、各個になすことゝなりしも、之が爲め分離したるにはあらず。講員は市區のみにて五十餘名なるが、行德、船橋等を合すれば、頗る多數に上るべしと云ふ。

妙法一心講　講元は日本橋區松島町石井堅藏氏、世話人に同區蝦殼町二丁目十五番地鈴木喜三郎氏、同區同町三丁目十三番地福原鎗吉氏あり。此講は元と松島町妙行講より分れたるものにして、明治二十一年獨立し、本講名の本に講員を集め、約七十名に達したり。尙世話人に於て宗旨の爲め奮闘講員を募りつゝあれは、將來尙ほ大講社となるべし。池上山附なれども、諸山の事に關しては東京八講と行動を共にす。元來妙行講と分れしは此講が中頃顯本派に屬したるを以て池上に屬するを至當とする講員は、擧つて妙行講を脫して本講を組織し、前記二氏を世話人に擧げたるものなりと云ふ。

牛込千部講　講元は牛込區細工町二十六番地池田清吉氏なり。當講は明治十七年の創立にして、始めより池田氏之を統轄し、講員約參百餘名あり。庚申の月は必ず柴又經榮山題經寺に詣づるの規約を有す（但し五月の外は參拜隨意）。本講

が創立の日淺きにも拘はらず此くの如き多數の講員を得たるは、池田氏の努力は勿論講員の熱心思ふべし。而してかの帝釋天二天門前唐銅燈籠亀に額面、及び雜司ヶ谷鬼子母神寶前唐銅燈籠は、皆本講の寄進にかゝれり。嘗て講元より講中に同文せる牛込新講社中御心得方廣告なるものあり。誠に鄭重且つ秩序整然たるものなるが、頗る長文なるを以て左に其一部分を揭ぐべし。

抑法華宗門牛込新規講中取建の儀は去る明治十七年五月細工町貸本渡世池田清吉發起人より別紙の信者南榎町山出金之進神樂町有坂久介打寄申合せの上右三名相撰柴又千部中顯經寺へ參詣住職小泉日貞へ面會相談の上千部講取結決議相整候以來御信者方次第に御加入被下誠に以て難有仕合奉存候然る處右金之進儀は當時八十有餘の老衰久介儀は公務故轉宅致當區不住何分講元清吉一人にては月々一錢づゝ懸金取集並御札等講中方へ配達方手間り兼候私共世話人に相成萬端取扱等罷在候事（以下略す）

谷中帝釋講　講元は下谷區上野櫻木町三十五番地熊井松五郎氏なり。此講は柴又帝釋天信仰により結社したるものにして、寛政年中の創立にかゝれり。維新の際一旦中絶せしが、明治の初年に現講元熊井氏の靈力にて復興し、講員約百名あり。諸山の開帳には、常に講元伸間の依頼に應ずは勿論、庚申には必ず講元の柴又に參拜すること他の講と異ならず。

八丁堀釋講　講元は深川區門前山本町形屋德三郎氏にして、講務代理京橋區八丁堀岡崎町二丁目秋山三五郎氏あり。此講はもと蠣殼帝釋講より分離し、現に講員貳百五拾名を有せり。什寶、日龜上人直筆の戒茶羅は、鳳輦の内張に用ひたる錦地切にして、實に他に比類なきものなり。庚申の月、柴又に參詣するは勿論、池上會式の折は本成院を借受け、此曼茶羅を揭げて講員の集合所となす。

京橋帝釋講　講元は京橋區松屋町三丁目八番地松田覺太郎氏なり。此講は築地帝釋講と唱へ、明治十三年の創立にかゝり、明治四十二年六月、現今の名に改めたり。佐渡始顯一圓菩提曼荼羅を什寶とし池上會式の折、長桑稻荷の前額堂を借受けて集合所とし、此所に此曼荼羅を掲ぐるの慣例なり。柴又に庚申毎に參拜すること他と同じ。講員約百六十名あり。

小網町結社　講元は神尾昌太氏なり。本講は柴又題經寺に屬し、講員約六十名あり。出開帳の際には、本講主となりて世話周施するの例あり。庚申の月柴又に參拜すること他に同じ。

蠣殼帝釋結社　講元は深川區森下町十九番地秋本春吉氏とす。明治十八年の創設にして、專ら秋本氏の靈力に因て成立し、現に講員約百六十名あり。庚申の月、柴又に參詣するは勿論、身延池上講中の諸山にも關係を有し、池上堀の内には必ず千部を勤む。此講には日朗上人及び鍋冠上人と稱する日親上人の直筆を什寶となせり。

月參講　講元は小石川區武島町十三番地宮崎廣吉氏なり。明治三十五年三月の創立にて、柴又題經寺に屬す。講員約貳百名を有し、宮崎氏熱心に講勢振興を圖りつゝあり。庚申の月には必ず柴又に參詣し奉納費用等は獨り講元の負擔となし居れり。

南北小名木川結社　講元は深川區東扇橋町七十五番地並木由太郎氏、世話人に杉田定次、本澤清八、田中千之助、田島七兵衛四氏あり。當講は今より十六年前、御手綱講に加入せしが、後又帝釋睦講に加入し、明治四十四年二月南北小名木川講社と改めたり。元と南北名木川井に御手綱講とし存したるも、今は御手綱講を廢したり。庚申の月、柴又に參拜し、殊に千部の時は必ず參詣するを要するなり。講員約百八十名あり、名は南北小名木川講社なれども、東京御手綱講には舊の如く加名し居れり。

八丁堀取持千部講　講元は日本橋區北島町大久保金太郎氏、世話人は福田一太郎氏なり。明治二十七年中、大久保福田兩氏の組織したるものにして、爾後五年間非常苦心の末漸く整頓せるものなり。目下講員約七十名なるが、兩氏は今尙ほ講の爲めに靈力しつゝあり。東京睦講に加入七講の内なり。庚申の月に柴又に參詣すること他講と同じく、池上會式の際は寺中輪堂を借受け集合所となせり。

下谷題經講　目下の講元は下谷區二長町森田新三郎氏といふ、元と高田八右衛門篠崎喜平兩氏の創立したるものにて題經寺三代前の住職上人より與へられたる講名なり。中頃頗る衰へたるも、講元森田氏及び世話人奥野定次郎氏が非常なる靈力の結果僅に二十八名の講員より約三百名の多數を有するに至れり。此講の特色としては、諸山の出開帳に當り、他講社の依賴あれば、快く應じ充分の世話を爲すは勿論、遠國の諸山より依賴ある場合と雖も應分の贊助を爲すことなり。之れ森田奥野兩氏が信心堅固の致す所なり。

龍神祈禱講　講元は下谷區四町三番地ちの六伊佐治惠逢師といふ。元と寺町講と唱へ中頃御水屋講と稱したりしが、題經寺より今の名を與へられたり。成立は殆ど百年前にあり、一時は大に奮ひたれども、近來やゝ衰勢ありしを以て師は再興のことに靈力ぜられつゝあり。講員約百名相當に積金をも有し、師は夙に一の教會所を設くるの素願なりと云ふ。本講の什寶に經机あり、何れの出開張にも此經机を提供するの慣例なり。庚申には必ず柴又に參詣す。

東京淺草帝釋結社　講元淺草區田原町十四番地田中錬義氏、幹事に下谷區山吹町十七番地鈴木三之助氏あり。田中氏の創立する所にして、明治三十八年中東京帝釋事務所として題經寺の許可を得たるも、後故ありて本講名に改めたり。庚申の月、一人に付金一圓を題經寺に奉納し來れるも、他講との振合に倣ひ今は金五十錢を奉納することに改む。現在講員約

二百名あり頗る盛大あり。

神田經榮講　講元は本所區松井町一丁目十三番地池上長次郎氏と明治十九年秋柴又帝釋天出開張の折、神田和泉町一番地篠崎喜平氏の靈力により設立され、神田岩本町平井善吉氏を講元とし、明治四十四年より池上は其後なつげり。元と外神田萬代講より分れたるものにして、講員百七十名あり。講中に柴又に參詣する等皆他講と變ることなし。

淺草妙敎結社　講元は淺草區神吉町十三番地大江金太郎氏なり。明治四十四年靈應講より分離したるものにて經營山題經寺に屬し、講員約百名あり、元と題目睦講と稱する結社ありしも、此講と合併せり。庚申の月柴又に參詣し諸山の開帳に關係する等他講社と異ならず。中村弃吉氏等亦世話人として誠心靈力しつゝあり。

帝釋御前立講　講元は麹町區麹町四丁目二番地加藤長右衛門氏とす。約二百年前に成立てる舊講社にして、現講元は數代前より代々講元を勤め、他講の如く數ば交迭せざるは一特徴と云ふべし。講員も亦信心堅固なる者のみにして、現に百三十餘名あり。

四谷橘結社　講務代理麹町區麹町七丁目八番地澤田定次郎氏あり。明治十年頃四ツ谷元講より分離し、澤田氏は十三年より事務を取扱ひ來れり、講員約百五十名。東京十講に加名したることあるも、今は獨立講となり、專ら帝釋講に力を盡しつゝあり。但し諸山の出開帳には取持世話するの定あり。

麹町結社　講元に麹町區麹町六丁目、伊藤初太郎氏、世話人に澤田定次郎氏あり。約二百年以前に成立せる講社にして、麹町區内最古のものにして橘結社の如きも本講の分身なりとす。講の眼目は橘講に同じ。

柴又御造酒講　講元を深川區黑江町十一番地森田梅吉氏といふ。天保四年に組織され現講元まで四代目なり。

講員は約二百五十名。柴又四講の内にして、庚申の日他講社は御水を講中に配付するも、本講に限り、味淋酒を配付し、其費用は講元負擔にかゝれり。庚申には前日より題經寺に詰め、當日の奉納物を取纏め、寺に納めて後歸ることゝなり居れり又御造酒を献ずるは本講に限れり。

木場結社　講元は深川區大和町十番地平田延吉氏世話人は深川區鶴歩町三番地宮崎喜之助氏といふ。元柴又塔婆木講と稱し、明治十五年に創立し爾來芝又山附として庚申に出張毎年千部に大塔婆を奉納することゝ定めたり。明治十四年一月池上長榮講深川二十三日講と合併して木場結社と改稱し、山附は柴又、池上、片瀬、駒木、深川祖師堂等を參拜するを以て本分とす。頗る盛況なり。

雜司ヶ谷共親會　講元は北豐島郡高田村大塚藤平氏、世話人は吉倉清太郎、兜木岩次郎、戸張丈太郎、入江多喜藏の四氏なり、鬼子母神に屬したる講社にして、元來鬼子母神は幕府時代までは諸侯の歸依多く頗る繁盛せしも維新後一時衰微の兆ありしかば、常時の鬼子母神堂々司、現法明寺主近江正瑞上人之を憂へ、今の高田農商銀行重役新倉德三郎及び府會議員大塚藤平の二氏と振興策に就き協議せり。仍て新倉氏は更に村會議員吉倉、兜木、戸張の三氏に協議し、大塚氏と協力奔走の結果十月十二日より十八日までの會式には、諸講社より萬燈を出すことゝなりしかば、此一週間内に集まり來る萬燈は實に百數十餘燈に達し、殆ど池上をも凌駕せんばかりとなれり。之れ偏に有數氏及び各世話人の靈力、且つは正瑞上人の深き苦慮の賜と云ふべし。斯の如くにして、信徒統一上講社の必要を認むるに至れり、本講社は組織せられ現村長柳下氏助役吉野氏等、亦間接直接靈力せられつゝあり。

雜司ヶ谷妙法結社　世話人に高田村字雜司ヶ谷高橋勝五郎、及安井銀太郎の兩氏あり。此講は講元を設けず、右二

氏にて萬事の斡旋をなせり。身延山に屬し德川幕府開府と同時に成立せしものにして、爾來引續き講員百名を有せり。實に雜司ヶ谷草分けの人々の信仰より起りたるものなれば、基礎最も確實なる講社なり。故に新加入の講員は成るべく勸誘せざるも、東京八講十講神田八講等とは交際を保ち居れり。もと妙法講と唱へたるが明治三十一年三月、妙法結社と改めたり高橋氏は身延の事に當り、安井氏は池上の事に當り、分擔となり居れども、一般に二氏共同にて講務を執り居れり。

七五三結社　講元は、下谷區東黑門町三十二番地井上太左衞門氏なり。文政以前、現講元五代の祖太左衞門氏の組織したるものにて、下谷摩利支天屬のものなり。夫れより引續き子孫にて講元を爲し、他人に預けたることなきは異例と云ふべし、年中奉納の天水桶三寶等は摩利支天を飾る唯一の道具なり本講は一時、神田八講等と肩を比したる盛大の講にて「神田八講か七五三雨の降る夜も風の夜も萬燈立ていさましく」云々と謳はれし事さへあり。現在庚員百六十名。諸山出開帳には出るも敢て世話すると云ふことなし、四五九の亥の日に摩利支天に詣で池上會式に參會するは勿論現在講元の靈力にて講況益盛大となり居れり。

淺草開運構　講元は淺草北田原町三番地鈴村清太郎氏なり。當講は柳島妙見山に專屬し、明治初年の創立にして、鈴村氏の靈力にて講員約百五十名を有す。妙見山の外一切他講社に關係せざる獨立講なるが、毎年冬至には全講員を會し星祭りの典を擧げ、其費用は一切講元の負擔に歸し、一厘の費も講員より徵せずといふ、他講に見ざる特色なり。

東京精運講　講元は本所區花町一番地加藤米吉氏あり。明治十七年葛飾郡一の江村高橋虎五郎氏の創立にして、講名は日淳上人の與ふる所なり。其起因は同氏壯年血氣に任せ金の有るまゝに遊蕩際限なしと云ふ風なりしが、二十六歲の頃に至つて翻然其非を悟り、罪障消滅の爲め原木山日淳上人の祈禱を受け、大に改悔の功を顯はせり。爾後三

年間、病氣其他災害に罹り苦しむ者に法華信心の事を勸め、自らも罪障消滅の祈禱に委れ、自ら費用を出して醫藥を勸め、本山の祈禱を請はしめたり。されば僅かの田畑より收納するもののみにしては、費用支へ難きを感し、稼業をなしながら法華信者を勸誘せんとの大決心を起し、一の江の土地は悉皆賣却し、本所に薪炭業を始め、又令弟直次郎氏も淺草に同業を起せり。業務は日を追うて盛大となり、講社も其結果驚くべき發展をなし、目下は講員約六百名實に無比の盛況なり。虎五郎氏は明治三十二年四十歲にて死去し、令弟直次郎氏其業を繼續し居れり。

一妙結社　講元は神田區松下町十五番地竹本日妙師なり。本講は國家安穩を祈禱し、法華を弘通し、以て一切衆生を助くるを其本分とする。有邊塞實大壽量本敎院敎師の師は弘通の一代基礎は結社にあるを感じ、明治四十四年七月之を創立せり。加持祈禱、亦弘通の一端として衆生の依賴に應じて之を行ふ。

中山派祈禱所　行者は牛込區榎町十七番地泉澤さよ子なり。さよ子は本年五十五歲なるが、幼少より孝女の鑑として世人の嘆賞する所となれり。然るにさよ子は、又敬神の念深く、法華經の大信者となり、中山祈禱所を起して至誠祈禱を行ひ、人を救ふを以て本務となす。其德により年老ひて福利を得、困窮者には流涕して清き施しを爲すが故に、信者常に門に絕ずといふ。

新曾人形町子安講　講元は日本橋區長谷川町十六番地掛川幸次郎氏なり。明治十一年の創立、先代下駄屋氏の發起にかゝり武州新曾村妙見寺に屬す。講員約五十名なるが、目下講員募集に盡力し居れば今後必ず盛大となべるし。

東京感應結社　講元は本郷區根津八重垣町二丁番地、福島甲子次郎氏なり。此講は山中川端本壽寺內感應日蓮大菩薩を信仰の爲め、殆ど五十年前に創立されしものにして、中頃廢絕したるを現講元の靈力にて再興したるなり。元と本壽

寺に屬すと雖も、亦池上に參詣することを怠らず、且つ諸山の開帳にも相當の應援をなしつゝあり。世話人中村萬太郎氏も亦大に講の爲めに盡力し、目下講員約八十名あり。

根津谷リ巳元講　講元は下谷區谷中上三崎南町六十番地深山房吉氏なり。當講は七嘉大善神に屬し。其成立甚だ古しと雖も中頃解頽せしが、明治四十四年、深山氏復興の企てをなし、今や約百名の講員を集むるに至れり。就中爲講員は殆ど皆無にして何れも皆新講員なり。講名は大善神の神慮と、地元の元を取りて斯くは名づけたりと云ふ。世話人宮田三五郎氏、又深山氏と共に法門の爲めに盡力せらる。

日蓮宗高僧傳附錄 終

印刷日　大正元年十月五日
發行日　大正元年十月十五日

日蓮宗高僧傳

定價金八拾錢
郵送料金八錢

編輯兼發行人　東京市牛込區通寺町十四番地　下平幸平

著作者　東京市牛込區早稻田町五十二番地　菱沼哲之介

印刷人　東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地　川西房次郎

印刷所　東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地　公木社

發行所　東京市牛込區通寺町十四番地　江戸新報社

發賣所　東京市牛込區神樂坂上　南北社書店
內外圖書出版販賣
振替口座東京一九四番
電話番町三八〇四番

版權所有

824
316

國民の師表としての乃木大將

最新刊

讀賣新聞社編

師表乃木將軍

▲特約賣捌所 東京堂 東海堂 上田屋 其他

△四六判 洋裝美本
△總紙數 三百餘頁

三色版及鮮麗挿畫四葉挿入　定價金八拾錢　郵送料金六錢

本書は讀賣新聞社編輯局が最も正確、斬新、豐富なる材料に依り責任を以て編著せるものにして群書中最も特色ある正傳也、將軍を追慕崇敬する我が六千萬の國民、殊に宗教家、軍人、學校職員の愛讀謹誦すべきものは卽ち是れ!!

東京市牛込區神樂坂上（電話番町三八〇四番）

8. 6. 11

58.

終